

第39回北陸医学会総会

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/7832

正 証 表

金沢大学十全医学会雑誌 第94巻 第5号

第8会場 小児科分科会 1009頁, 29行目~30行目

誤	正
8. 1983年のエコーウイルス24型感染に関する血清免疫学的所見	8. 1983年エコーウイルス24型感染に関する血清疫学的所見

学 会

第39回北陸医学会総会

日 時：昭和60年9月1日(日)9時

場 所：主会場 福井医科大学

分会場 福井県医師会館

シンポジウム「循環器疾患治療の進歩」

司会 宮保 進 (福井医科大学第3内科)

清水 健 (金沢医科大学胸部外科)

1. 高血圧症の治療
原 晃 (福井医科大学第1内科)
2. 弁膜症の内科治療
三船順一郎 (福井循環器病院内科)
3. 弁膜症の外科治療
千葉幸夫 (福井医科大学第2外科)
4. 冠動脈疾患の内科治療
松井 忍 (金沢医科大学循環器内科)
5. 冠動脈疾患の内科治療
久津見恭典 (福井医科大学第3内科)
6. 冠動脈疾患の外科治療
坂本 滋 (金沢医科大学胸部外科)
7. 心筋疾患の治療
余川 茂 (富山医科薬科大学第2内科)
8. 不整脈の治療
三崎拓郎 (金沢大学第1外科)

第1会場 内科分科会

第128回 日本内科学会北陸地方会

座長 佐賀 務 (福井医大第3内科)

1. 入院中に偶発した破傷風の1治療例
○久津見専 (福井市久津見内科病院)
2. 自己免疫性溶血性貧血に間質性肺炎を合併しサイトメガロウイルス肺炎にて死亡した1例
○金森一紀, 岡藤和博, 高倉文嗣
魚谷洗平, 吉田 喬, 中村 忍
松田 保 (金大第3内科)
3. 肺炎症例における胸部CTの施行経験
○西岡真二, 南 真司, 吉田潤子
能海 勲 (井波厚生病院内科)
石崎良夫 (同 放射線科)
座長 十倉保宣 (国立鯖江病院内科)
4. 肉芽腫性肝炎を伴ったピペラシリンによる肉芽腫性肺炎の1例

○前川 裕, 山崎 洋, 大谷信夫
(金沢医大呼吸器内科)

安原 稔, 松田芳郎 (同 消化器内科)

藤井隆広, 山道 昇, 小西二三男
(同 病理)

5. 左側胸部流注腫瘍の1例
○朝倉英策, 近藤邦夫, 中尾真二
新井裕一, 北尾 武 (国療金沢若松病院内科)
中村 毅, 森 明弘, 宮崎誠示
(南ヶ丘病院)
6. 胸腔内脂肪腫の3例
○越野 健, 浜田誠人, 林 武彦
北中 勇, 立村森男, 森永健市
(浅ノ川総合病院内科)
7. 喀痰中に石綿小体を認めた肺癌の1剖検例
○村本信吾 (公立能登総合病院内科)
奥村義治 (金沢医大公衆衛生)
北川正信 (富山医薬大病理)
座長 三船順一郎 (福井循環器病院内科)
8. 三尖弁閉鎖症の長期生存例
○安田紀久雄, 平田昌義, 北野博嗣
泊 康男 (北陸中央病院内科)
塩谷謙二 (国療富山病院内科)
9. 内腸骨動脈瘤破裂の1例
平岩善雄, 文字 直, 楠 憲夫
代○清水邦芳, 荒木一郎, 品川俊男
永森正秋 (富山赤十字病院内科)
麻柄達夫 (同 心臓外科)
酒井 晃 (同 泌尿器科)
10. 異型狭心症例に対する冠動脈内アセチルコリン投与試験
○松山文男, 三羽邦久, 後藤雅博
李 鐘大, 加藤 大, 清水寛正
堂前尚親, 原 晃, 中村 徹
(福井医大第1内科)
11. 不整脈における興奮旋回について
—基礎的臨床的研究—
○久保田幸次, 杉本尚樹, 森下大樹
寺川俊典, 高田重男, 池田孝之
服部 信 (金大第1内科)
座長 加藤卓次 (福井医大第2内科)
12. 上腸間膜動脈症候群の2例
○米島正広, 若林時夫, 鈴木邦彦
田辺 釧, 杉岡五郎 (国立金沢病院内科)
滝田佳夫 (同 外科)
13. 多発性消化性潰瘍を併存した表層性拡大型悪性リンパ腫の1例

- 加登康洋 (加登病院)
 岡井 高 (金沢大がん研内科)
 北村徳次 (同 外科)
 小西二三男 (金沢医大病理)
14. VEMP 療法が著効を呈した大腸悪性リンパ腫の 1 例
 ○前川直美, 林 正則, 秋田裕一
 山岸利栄, 尾崎鑑治, 大隅敏光
 向野 栄 (福井赤十字病院内科)
 津谷 寛 (福井医大第 1 内科)
15. ミオグロビン尿症を伴った劇症肝炎の 1 例
 ○佐藤重彦, 稲垣 豊, 荒井志郎
 黒崎正夫 (富山市民病院内科)
 高柳宇立 (同 研究検査科)
 座長 川瀬満雄 (福井赤十字病院内科)
16. 著明な黄色腫を伴ったヘテロ家族性高コレステロール血症の 1 例
 ○沢崎茂樹, 朝日寿実, 横山彰仁
 由井米光 (済生会高岡病院内科)
 浜崎智仁, 矢野三郎 (富山医大第 1 内科)
17. 高令女性で痛風発作の初発をみた 1 例
 ○秋山 敬, 安藤 明, 春木克夫
 (藤田病院内科)
 宮崎良一, 河合盛光 (金大第 2 内科)
 森河 浄, 黒田満彦 (福井医大中央検査部)
18. 低血糖昏睡により Rhabdomyolysis をおこしたと思われる DM の 1 例
 ○北川浩文, 潮木保幸, 中村 聡
 登谷大修, 中屋昭次郎, 柳 碩也
 (福井県済生会病院内科)
 能登 裕 (金大第 1 内科)
 座長 岸田 繁 (福井医大第 3 内科)
19. 低ナトリウム血症を契機として発見された ACTH 単独欠損症の 1 例
 ○中川 淳, 西野逸男, 中村保雄
 蜂谷春雄, 山田隆千, 積良 愚
 (水見市民病院内科)
 江守 巧, 阿部 浩 (同 脳神経外科)
 中林 肇 (金大第 2 内科)
20. 汎下垂体前葉機能低下症を伴った Empty sella syndrome の 1 例
 ○真田 陽, 小田秀治, 宮本市郎
 西村泰行, 宮腰久嗣, 能登 裕
 (金大第 1 内科)
21. 血小板減少性紫斑病を合併した甲状腺機能亢進症の 1 例
 ○藤井寿美枝, 榊田昌之助, 森 清男
 (芳珠記念病院内科)
- 川東正範, 宮森 勇 (金大第 2 内科)
22. 乳頭腺癌に併発した甲状腺未分化癌の 1 例
 ○浦島左千夫, 宮内英二, 小豆沢定秀
 山本郁夫, 細島弘行, 内田健三
 森本真平 (金沢医大内分泌内科)
 松能久雄 (同 病理部)
 座長 堂前尚親 (福井医大第 1 内科)
23. 原発性副甲状腺機能亢進症を合併した Multiple hamartoma syndrome (Cowden 病) の 1 例
 ○瀬田 孝, 京井優典, 吉光康平
 三輪梅夫, 大家他家夫 (石川県立中央病院内科)
24. グルココルチコイドにより血清 K が正常化した原発性アルドステロン症の 1 例
 ○皆川冬樹, 永井国雄, 飯川能彦
 川東正範, 中林 肇, 岡本清也
 池田正寿, 宮森 勇, 竹田亮祐
 (金大第 2 内科)
 臼倉教臣 (同 医療短大部)
25. 高グルカゴン血症を呈し, 低血糖症状をくりかえす透析の 1 例
 ○藤田恭子, 小西堅正, 浜田 真
 吉村 陽, 水毛生直則, 能登 稔
 織田邦夫 (鳴和総合病院内科)
 座長 平山幹生 (福井医大第 2 内科)
26. 低レニン性低アルドステロン症を呈した Mito-mycin C 腎症の 1 例
 ○竹森康弘, 里村吉威, 太田英樹
 中村勇一, 岡井 高, 沢武紀雄
 (金大がん研内科)
 高橋 豊 (同 外科)
27. 脳幹幻覚症を伴った両側性核間性眼筋麻痺を示した 1 例
 ○島 孝仁, 新井裕一, 永田美和子
 安田厚子, 福原信義, 高守正治
 (金大神経内科)
28. 呼吸不全をきたした Nemaline myopathy の 1 例
 ○前川 裕, 半田芳治, 小副川寛
 炭谷哲二, 竹越国夫, 太田正之
 遠山龍彦, 奥田治爾 (高岡市民病院内科)
 座長 内田三千彦 (福井医大第 1 内科)
29. 甲状腺原発非ホジキンリンパ腫の 1 例
 ○日月香代子, 岩淵邦芳, 大竹茂穂
 吉田 喬, 中村 忍, 松田 保
 (金大第 3 内科)
30. 前立腺癌を併発した Primary myelofibrosis の 1 例

- 宮前雅見, 津谷 寛, 安藤精章
加川大三郎, 内田三千彦, 堂前尚親
原 晃, 中村 徹 (福井医大第1内科)
村中幸二, 河田幸道 (同 泌尿器科)
31. Multicentric angiofollicular lymph node hyperplasia の1例
○稲津哲也, 木村和弘, 山村真由美
佐賀 務, 中井継彦, 宮保 進
(福井医大第3内科)
細川洋平 (同 検査部)
堂前尚親 (同 第1内科)
32. 除虫剤服用後に著明な凝固障害をきたした1例
○金井正信, 水野恭嗣, 山本正和
浅山邦夫, 杉本立甫 (砺波総合病院内科)
伊藤恵子, 吉田 喬, 松田 保
(金大第3内科)
座長 羽場利博 (福井県立病院内科)
33. 慢性関節リウマチに合併した Nodular regenerative hyperplasia と思われる1例
○炭谷哲二, 北村 勝, 半田芳治
西村信行, 桜井 滋, 小副川寛
竹越国夫, 太田正之, 遠山龍彦
奥田洽爾 (高岡市民病院内科)
34. 直腸生検で確診された悪性関節リウマチの1例
○津川喜憲, 松田博人, 中島昭勝
宮崎良一, 東福要平, 竹田亮祐
(金大第2内科)
35. 腹水を主症状とした SLE の1症例
○宮城裕子, 藤田益雄, 能沢 孝
飯田博行, 水村泰治, 篠山重威
(富山医薬大第2内科)
神保正樹 (富山労災病院内科)
36. IgA 単独欠損症を合併した MCTD の1例
○寺田康人, 高桜英輔, 牧野 博
泉野 潔, 岩瀬信生, 森岡 健
横川 博 (黒部市民病院内科)
座長 中屋昭次郎 (福井県済生会病院内科)
37. 呼吸器症状, 消化器症状を主とし診断困難であった結節性動脈周囲炎の1例
○林 武彦, 越野 健, 浜田誠人
北中 勇, 立村森男, 森永健市
(浅ノ川総合病院内科)
38. 多彩な自己抗体陽性を呈した Behcet 病の1例
○多喜博文, 杉山英二, 山下直宏
加藤弘巳, 矢野三郎 (富山医薬大第1内科)
39. 脊髄横断症状が急速に進行した化膿性脊椎炎の1剖検例
○土田敏博, 松井俊二郎, 井上恭一
佐々木博 (富山医薬大第3内科)
能沢 孝 (同 第2内科)
高野治雄, 玉置哲也 (同 整形外科)
小泉富美朝 (同 第2病理)
40. 後腹膜膿瘍の2症例
○木下晴生, 加藤卓次, 鈴木邦夫
野村元積, 多田利男, 中永昌夫
中尾直樹, 平山幹生, 郡 大裕
藤木典生 (福井医大第2内科)

第2会場 耳鼻咽喉科分科会

日本耳鼻咽喉科学会北陸地方部会連合会第241回例会
一般演題

1. 福井県小児療育センター開院後2年間の統計
— 難聴幼児を中心に —
○木村恭之, 中野幸治, 松木滋美
福原 満, 時田博子, 山本勇志
(福井県小児療育センター)
2. 当科で言語治療を受けた重度聴覚障害児の学業成績
○鈴木重忠, 能登谷晶子, 古川 仍
宮崎為夫, 梅田良三 (金沢大)
3. 両側感音難聴症例における耳鳴のラウドネスの推定
○松平登志正, 山下公一 (金沢医大)
4. 顔面神経麻痺における眼球上転速度分析について
○伊東宗治, 渡辺行雄, 麻生 伸
浅井正嗣, 今村純一, 渋谷知子
寺園公雄 (富山医薬大)
5. 鼻石の2症例
○松本順雄, 黒川泰資, 佐藤文彦
齊藤 等 (福井医大)
6. 両側上顎洞 Osteoma の1症例
○小野 聡 (恵寿総合)
鵜家 透, 三輪高喜 (金沢大)
7. 小児にみられた耳下腺粘表皮腫瘍の1例
○石川 滋, 大角隆男, 豊田 務
(厚生連高岡)
8. Heerfordt 症候群の1例
○田中佐一良 (金沢大)
北川和久, 田近由美子 (富山県立中央)
9. 下顎骨頭高位骨折の1治験例
○坪川俊仁, 齊藤 等 (福井医大)
石井保雄 (同 歯科口腔外科)
高波二三 (国立鯖江)
10. 当科における白板症の統計的観察

○大尾嘉宏巳, 山本 憲, 梶田 耕
加納 晃, 宮崎為夫, 梅田良三
(金沢大)

11. 過去 17 年間にみられた反回神経麻痺の集計

○長山郁生, 嘉藤秀章, 西郡 聡
加勢 満, 梅田良三 (金沢大)

12. 先天性脊椎, 骨端骨異形成症における喉頭発育形成不全について

○神田憲一, 大井秀哉, 渡辺行雄
吉田行夫, 浅井正嗣, 水越鉄理
富山医薬大)

13. 頭頸部領域における NMR-CT の使用経験

○佐々木周興, 山下公一, 小川 明
坂本 守, 吉江忠正, 増井知彦
(金沢医大)

第 3 会場 放射線科・核医学科分科会

1. 高線量率密封小線源による胆管癌の治療経験

石崎良夫, 征矢敏雄, 麻生正邦
龍 邦康, 古本尚文, 亀井哲也
二谷立介, 瀬戸 光, 柿下正雄
(富山医薬大放)

羽田陸朗 (同 放部)

阿部要一, 伊藤 博, 藤巻雅夫
(同 2 外)

2. ICRU の線量表現にもとづく照射方法の最適化の検討 (第 1 報)

立野育郎, 多田 明, 高仲 強
(国立金沢病院放)

兼松甫郎, 河原義則 (同 放射線治療部)

3. 平衡時心プールゲート法より求めた diastolic phase index と各心機能指標の相互関連性について

谷口 充, 寺田一志, 大場 洋
秀毛範至, 四位例靖, 滝 淳一
中嶋憲一, 分校久志, 利波紀久
久田欣一 (金大核)

4. 腫瘍新和性放射性医薬品^{99m}Tc ジネルカプトコハク酸 (DMS) の集積機序と腫瘍血管床との関連について

小鳥輝男, 柴田登志也, 山下敬司
前田尚利, 早川克己, 浜中大三郎
奥村亮介, 中津川重一, 石井 靖
(福井医大放)

5. 顔面・頸部の MRI

辰田 昇, 利波久雄, 中川哲也
東光太郎, 大口 学, 宝田 陽

小林 真, 宮村利雄, 山本 達
(金医大放)

6. 婦人科疾患における MRI の臨床応用

宝田 陽, 辰田 昇, 中川哲也
東光太郎, 大口 学, 利波久雄
小林 真, 興村哲郎, 山本 達
(金医大放)

7. 胸部断層撮影 - 腹臥位頭側高位法について -

上村良一, 伊藤 広, 高島 力
(金大放)

8. 副腎腫瘍の CT 診断

出町 洋, 永田一三, 長東秀一
西嶋博司, 龜山富明, 角谷真澄
鈴木正行, 高島 力 (金大放)
打林忠雄, 内藤克輔, 久住治男
(同 泌)

田村鋒男 (同 放射線部)

9. 肝海綿状血管腫超音波像の検討

小西秀男 (富山市民病院放)

10. GE CT-9800 を用いた肝の dynamic CT

蒲田敏文, 宮田佐門 (富山県中放)
松井 修 (金大放)

11. 石灰化を伴った胆道癌の 1 例

井田正博, 荒井和徳, 高山 茂
(福井県済生会放)
松井 修 (金大放)

12. 膵管と交通を示した膵のう胞腺癌の 1 例

高仲 強, 多田 明, 立野育郎
(国立金沢病院放)
道場昭太郎 (同 外)
若林時夫, 米島正廣, 鈴木邦彦
(同 内)
角谷真澄 (金大放)

13. 膵炎で稀な局在を示した extrapancreatic fluid collection の 1 例

荒井和徳, 井田正博, 高山 茂
(福井県済生会放)
松井 修 (金大放)

14. 小腸リンパ腫の 2 症例

蒲田敏文, 宮田佐門 (富山県中放)
黒田吉隆, 辻 正彦 (同 外)
松井 修 (金大放)

第 4 会場 形成外科分科会

第 26 回 日本形成外科学会北陸地方会

1. 金沢医科大学形成外科における 10 年間の熱傷患者統計

- 奥野滋子, 塚田貞夫, 岡田忠彦
安田幸雄, 北山吉明, 川上重彦
小島正嗣, 石倉直敬, 桜井伴子
北村謙二, 吉居賢介, 安田 浩
小屋和子 (金沢医大形成)
2. 熱傷ラット皮膚の無菌性・進行性壊死に対する
PGI₂ (OP 41483) の効果
○川上重彦, 安田幸雄, 桜井伴子
安田 浩, 塚田貞夫 (金沢医大形成)
3. 小児の上半身新鮮熱傷の検討
○赤羽紀子, 林 洋司 (富山県中形成)
4. 前胸部熱傷に対する early tangential excision
○荒井正雄, 山本正樹 (福井県立形成)
5. 抗生剤により骨髄抑制を起こしたと思われる熱傷
患者の1例
○黒川雅博, 宮永章一, 三好研造
(石川県中形成)
河村洋一 (同 血液免疫内科)
6. 熱傷創における Biobrane® の使用経験
○安田幸雄, 川上重彦, 桜井伴子
塚田貞夫 (金沢医大形成)
7. 唇顎口蓋裂による咬合異常の矯正歯科治験例
○高田保之, 大村由美子, 下村隆史
新沢 茂, 須佐美隆三 (金沢医大矯正歯科)
8. 口蓋粘膜を用いた眼瞼再建の2例
○宮永章一, 黒川雅博, 三好研造
(石川県中形成)
奥村 忠 (同 眼科)
林 守源 (同 病理)
9. 眼瞼下垂に対する手術の後, 過矯正により重症角
膜障害を来した症例について
○中村泰久, 山下 泉 (富山医薬眼科)
10. 唾液腺腫瘍の4例
○山上洋治, 太田真人 (富山市民形成)
11. 耳下腺およびその周辺部腫瘍の手術経験
○長谷田泰男 (高生連高岡形成)
岡田忠彦, 桜井伴子 (金沢医大形成)
12. 血管肉腫に対する温熱療法の効果
○北山吉明, 塚田貞夫, 置塩良政
安田 浩 (金沢医大形成)
宮村利雄 (同 放射線)
13. 家族内発生をみた Dupuytren 拘縮
○林 洋司, 赤羽紀子 (富山県中形成)
小島正嗣 (金沢医大形成)
14. 過去3年間の筋皮弁使用例の検討
○三好研造, 宮永章一, 黒川雅博
(石川県中形成)
- 山上洋司 (富山市民形成)
桜井伴子 (金沢医大形成)
亀井康二 (砺波総合形成)
15. 大殿筋皮弁を用いた褥創治療の検討
16. 形成外科領域における logotherapy
第VI報 儀式の功罪
○櫻 稀吉 (金沢市)

第5会場 神経科精神科分科会

第102回 北陸精神神経学会

一般演題

1. 若年健常者における SEP からみた中枢伝導時間
の検討
○平松 茂, 木原義春, 山口成良
(金沢大医神経精神)
越野好文 (福井医大神経精神)
湯上 博 (金沢大医検査部)
森田真紀子 (加賀八幡温泉病院)
矢敷恵美子 (今立中央病院)
2. パソコンによる睡眠データの整理について
○金 英道, 山口成良 (金沢大医神経精神)
3. 睡眠脳波異常を呈した神経ペーチェット病の1例
○森川恵一, 浜原昭仁, 古田寿一
鈴木道雄, 山口成良 (金沢大医神経精神)
4. 初老期痴呆における神経心理学的症状の特徴
○松原三郎, 中山 涉, 玉井 顕
三原栄作, 平口真理, 中川敦子
榎戸秀昭, 鳥居方策 (金沢医大神経精神)
5. Meige 病の1例
○伊藤達彦, 伊崎公徳, 越野好文
松原六郎, 三木勲男, 林 卓也
(福井医大神経精神)
6. Maprotiline 血清内濃度の測定について
○井上正雄 (七尾松原病院)
木戸日出喜, 倉田孝一, 山口成良
(金沢大医神経精神)
7. 「Typus melancholicus 志向社会」と症例
(その7)
○武内 徹, 小林克治
(高岡市民病院精神神経科)
8. 精神病院における心理劇と新しいダンス療法につ
いて
○桃井文夫, 松原太郎 (松原病院)
9. 全国の認可ディ・ケア施設の現状と問題点
○吉本博昭, 梶川正和, 山野俊一
水野 豊, 水上曜子, 小林貴美子
本田 徹, 草野 亮

(富山市民病院神経科精神科)

10. 脳波解析装置による脳機能の観察

○佐藤里子(佐藤病院)

第6会場 産科婦人科分科会

1. ITP 合併妊婦に、免疫グロブリン大量療法を施行し、無事分娩を終了した1症例

○川北寛志(金大産婦人科)

細野 泰, 千鳥哲也(富山市民病院産婦人科)

高田伊久郎(同 小児科)

吉田康二郎(同 内科)

山岸師則(山岸医院)

特発性血小板減少性紫斑病の新しい治療法として、Imbach らによる免疫グロブリン大量療法が注目されている。今回当院にてITP 合併妊婦で、免疫グロブリン大量療法とステロイド療法の併用により、帝王切開術で無事生児を得た一例を経験したので報告する。

症例：26才女性GoPo 17才時ITPと診断され入院治療を受けた。妊娠34週で血小板数5.9万と低値を示し、以後減少傾向がみられたため、昭和60年7月13日、妊娠39週2日で当科紹介入院となった。入院時血小板数は2.8万と著明に減少していた。γグロブリン400mg/kg/day 5日間及びデキサメタゾンを投与し、投与開始6日目に帝王切開術にて、3468gの男児を得た。血小板数は投与開始後10日目に最高値(15.4万)を示し、23日目に投与前値(2.6万)に復した。

免疫グロブリン大量療法では、一過性ながら投与後速やかに血小板を増加させる効果を有しており、手術などを行う場合には有効な治療法になると考えられた。

2. インシュリン治療を必要としたNID-DM 合併妊婦の1症例

○山崎 洋

(金大産婦人科, 公立羽咋病院産婦人科)

谷内荘成(同 内科)

近年我国においても糖尿病合併妊婦の増加傾向がみられ、産科臨床にきわめて重要な問題となっている。今回NIDDM 合併妊婦に対しインスリンを使用、正常値に近い血糖コントロールをし、母児共に良い結果を得ることができたので報告する。〔症例〕36才の初産婦。2年前にDM指摘されるも放置、妊娠6週75gGTTでDMと診断する。その後食事療法にて血糖正常化する。妊娠27週に到り、血糖コントロール不良となり、レンテインスリン使用し、血糖正常化する。妊娠40週で、分娩誘発、吸引分娩にて、正常女児3330g, APs9/10を得る。出生後低血糖など特に異常を認め

ず、産褥1日よりインスリン中止、食事療法のみで血糖正常化し、母児共に元気で退院となる。〔考察〕母児異常を少なくするために、血糖コントロールを厳しくし、治療目標を血糖の正常化におくことが必要で、そのためには、軽度DMでもインスリンを積極的に使う必要があると思われた。

3. 子宮外妊娠の統計的検討

○加藤三典, 鈴木信孝(金大産婦人科)

窪田与志, 飯田和質(福井県立病院産婦人科)

子宮外妊娠は臨床上しばしば経験する疾患であるが、術前診断は困難な場合も少なくない。今回我々は昭和50年1月より昭和59年12月までの10年間に当科で手術した84例について統計学的考察を行ったので報告する。

1) 外妊の頻度は分娩総数に対して1.0%であった。2) 外妊患者の年齢は26~30歳が最も多く次いで31~35歳, 20~25歳の順であった。3) 経産婦が比較的多くそのPeakは2回経産婦に認められた。4) 外妊患者の自覚症状では、下腹部痛、性器出血が高頻度に認められた。5) 外妊の95.2%は卵管妊娠であった。卵管の中では膨大部での妊卵着床が最も多かった。6) 卵管妊娠の罹患側については左側がやや多かった。7) 腹腔内出血量は500g以下の症例が53.6%あった。2000g以上の大量出血例も10%ほどみられた。妊反陽性率は66%、ダグラス窩穿刺のそれは88%であった。

4. ネフローゼ合併妊婦分娩成功例

○長岡 匡, 村上弘一, 原田丈典

橋本 茂, 富田嘉昌(金大産婦人科)

今回我々は、妊娠17週よりステロイド治療を行ない、無事妊娠、分娩を終えた症例を経験したので報告する。患者は19才女性。4才の時ネフローゼ症候群と診断された。妊娠歴は3妊0経、妊娠13週にて当科入院。検査所見で血沈72.6/107.3と促進し、血清T.P 4.4g/dl, 尿蛋白5.3g/日, 血清総cho 266mg/dlを示し、浮腫もありネフローゼの診断基準を満たしていた。腎機能はCcr 134.0ml/min, PSP 57%と正常であった。妊娠17週よりPrednisolone 40mg/day, 21週より30mg/dayと漸減して行き症状は次第に改善し、妊娠39週時2980gの男児を出産した。Apgarscore 10点で仮死、外表奇形は認められなかった。産褥5日目腎生検施行し、minimal changeの診断を得た。ネフローゼの妊娠許可条件およびステロイドの胎児に及ぼす影響について考察を加えた。本症例はステロイド合併妊婦成功例の貴重な一例として意義があると考えている。

5. 産褥脳内出血の症例について

○高木弘明, 高林晴夫, 杉浦幸一
桑原悠隆 (金沢医科大学産婦人科)

産褥期に脳内出血が発症した症例について報告する。患者は29才, G-1, P-0, 既往歴に特記すべきことはない。某医にて妊娠39週5日目に妊娠中毒症及び軟産道強靱により帝王切開術を施行した。児は3320g女児でアプガール9点であった。約11時間後, 突然痙攣, 意識混濁を認め, 抗痙攣剤, 降圧剤, 利尿剤などを投与し経過を見たが, 軽快せず当科へ紹介された。CT所見にて, 左側頭葉脳内出血と診断され, 脳外科へ入院となった。脳代謝賦活剤(ニコリン, ルシドリール)副腎皮質ホルモンによる治療を行ない約12時間後, 意識改善を見, 翌日には, 意識清明となった。入院後23日後のCTにても出血巣の改善がみられ, 退院となった。

子痙の発作を認める場合は必ずルーチン検査として, CTを施行することが必要であることが, 再認識された。又, 出血の程度, 部位によっては, 本症例のように比較的, 速かに改善することを経験した。

6. 三胎2児紙様児の1例

○矢後 均, 栗林実世治, 伊藤達也
大沢 汎

(金大産婦人科, 厚生連高岡病院産婦人科)

最近, 三胎の2児が紙様児で生児が早産した症例を経験したので報告した。

症例は28歳の0妊0産で血族中に多胎および奇形歴はない。最終月経昭和59年8月30日より5日間, 9月5日よりクロミフェン1錠/日内服。10月6日妊娠5週, 分娩予定日昭和60年6月7日と診断, 11月30日(妊娠13週)超音波検査で三胎を確認, 12月7日(妊娠14週)1児の心拍動(-), 2月16日(妊娠24週)さらに1児の心拍動(-)となった。4月5日妊娠31週5日で1732gの男児を早産, 2分後に474gの胎盤を娩出したが, 卵膜の2ヶ所が異常に厚く黄白色で大きさはそれぞれ3.0×3.0×0.8, 6.0×7.0×1.0cmで, 圧平された紙様児の存在が疑われた。病理組織検査で未熟な軟骨組織, 類骨組織, 骨組織が一定のPatternを形成するように配列しており, 周囲に横紋筋組織もみられ, その他の組織は不分明であるが胎児性組織であると診断された。以上の臨床的, 病理学的所見より三胎2児紙様児と診断した。

7. Dandy-Walker 症候群の同胞例

○矢後 均, 栗林実世治, 伊藤達也
大沢 汎

(金大産婦人科, 厚生連高岡病院産婦人科)

Dandy-Walker 症候群の同胞例と思われる稀な症例を経験したので報告した。

症例1: 患児の母は, 25歳で1回経妊, 1回経産, 父は, 34歳で互いに血縁関係を認めるが, 何世代前かは不明。分娩予定日昭和59年10月20日。妊娠29週の超音波検査, 胎児頭部C-Tスキャンよりこの胎児を先天性水頭症と診断し, 妊娠36週で帝王切開, 児の手術を勧めたが両親の同意を得られず断念, 早期娩出を希望した為止むを得ず, 妊娠31週4日に帝王切開術を施行。頭囲41.0cm, 胸囲26.0cmと胸廓に比して頭部が著しく大きく, 殊に後頭部の突出が著明で, 剖検の結果, D-W 症候群に脳梁欠損症を合併したものと診断された。

症例2: 症例1の姉。分娩予定日昭和57年7月31日。超音波検査, 羊水胎児造影より先天性水頭症と診断し, 妊娠36週2日に分娩誘発死産。剖検は得られずD-W 症候群の確定診断はできないが, 後頭部の著明な突出した特徴的な所見より本症候群と断定してよいと思われる。

8. 経頸管的卵移植法と手術的卵移植法の比較

—マウスを用いた実験から—

○本保喜康, 瀬戸俊夫, 山田武法

由田 譲, 高邑昌輔 (国立金沢病院産婦人科)

卵移植には, 開腹後子宮筋層を通して子宮内腔に達する方法と, 子宮頸管を通して内腔に達する方法がある。前法は動物に, 後法は人間の卵移植で用いられている。私共はマウスを用いて両法を比較した。次表に実験結果を示す。実験では前法の方が, 後法よりも成績が良い。しかし確実に子宮内腔に達するように, 且つ子宮内膜の損傷を少なくするように器具を改良した所, 後法でも成績が向上して来た。

		妊 娠 率
手術的方法		3 / 5 (60%)
	器具 I	1 / 24 (4%)
経頸管的方法	器具 II	2 / 9 (18%)
	器具 III	4 / 10 (40%)

元來経頸管的方法は, 手術的方法に比べ不利とされている。それは確かである。しかし動物実験ではあるが, 近年散見される報告及び本実験によっても, 経頸管的方法の成績向上が見られる。この事は人間の卵移植においてもさらに技術開発が行われるべきであろう事を示している。

9. 副腎性 Androgen 投与の幼若雌ラット血中 FSH, LH, PRL に及ぼす影響

○生水真紀夫, 鈴木信孝, 富松功光
大崎勝三, 寺田 督 (金大産婦人科)

〔目的〕 Dehydroepiandrosterone (DHA) の性成熟過程への影響を検索する目的で, 新生仔ラットを用い血中ホルモンの経時的変化の面から検討したので報告する。〔方法〕 1日齢の Wistar 系雌ラットに DHA 44 mg/100 g B.W. を投与し, 2, 5, 10, 15, 25日齢に駆幹血採血または断頭採血を行い, gonadotropin (LH, FSH), prolactin (PRL), estradiol (E2), testosterone (T) を測定し対照群と比較検討した。〔成績〕 血中 LH および FSH は, 対照群では 1日齢で夫々 2.94 ± 0.45 , 26.20 ± 2.16 ng/ml と雄 (1.03 , 10.81 ng/ml) に比し有意に高値であった。2日齢では, 夫々 1.36 ± 0.40 , 18.28 ± 1.76 ng/ml と低下し, その後5日齢より上昇, 15日齢で 2.26 ± 0.60 , 27.00 ± 3.00 ng/ml とピークに達した。25日齢では 0.76 ± 0.10 , 9.56 ± 1.12 ng/ml と再び低下した。これに対し, DHA 投与群では, 2日齢で対照群より低値を示し, 5日齢では 0.98 ± 0.10 , 17.97 ± 1.54 ng/ml と有意の低下が認められた。15日齢のピークは対照群とほぼ同様に認められ, 25日齢では対照群に比し LH の有意の上昇, FSH の上昇傾向が認められた。PRL は 0~15日齢で, $1.97 \sim 0.88$ ng/ml と低値であったが, DHA 投与群ではこれに比しやや高値を示した。25日齢では, DHA 投与群 33.43 ± 11.48 , 対照群 21.53 ± 0.79 ng/ml と前者が有意に高かった。血中 T および E 値は DHA 投与群では 2~8日齢で対照群に比し高値であったが, 10日齢以降では差がみられなかった。〔結論〕 DHA を 1日齢に投与した場合, 新生仔期において, LH および FSH の低下と PRL の上昇をもたらした。これら生後早期にみられる効果は E 作用によるものと推察された。

10. Meigs 症候群の 1 例

○井川一正, 藤田 克, 石川 宏
(金大産婦人科, 高岡市民病院産婦人科)

多量の胸水, 腹水の貯溜を認め, CT 及び超音波所見にて卵巣癌が強く疑われ, 手術適応なしとされたものの, 幸運にも, 試験開腹時, 腫瘍は全摘出された症例である。術後, 病理診断にて, 良性の更膜細胞腫であることがわかった。術後, 急速に, 腹水, 胸水の消失を見, 呼吸状態の改善とともに全快した症例であった。

術前, 血中エストラジオール 48.5 pg/ml であったが, 術後, 18.9 pg/ml と減少したこと, 及び, 年令的に, LH 8.5 μ l/ml FSH 12.7 m μ /ml と閉経後として

値が低く, ホルモン産生腫瘍であったものと考えられる。

11. 下腹部のヘルニア症例検討

○田中裕子, 林 恵子, 山城 玄
荒木克己, 杉田直道, 山田光興
(金大産婦人科)

下腹部腫瘍と鼠径ヘルニアをみとめた 3 症例の手術から考えさせられたことがあったので報告した。はじめの症例は 14 才で 2 回に及ぶ右鼠径ヘルニア手術の既往を持ち, 今回も卵管及び卵巣が内容である鼠径ヘルニアを再度みとめた症例。2 例目は 75 才で術前に鼠径ヘルニアと考えて手術した所, 悪性リンパ腫であった例。3 例目は 66 才で卵巣癌の一部が鼠径ヘルニアとしてあらわれた症例です。

これら 3 例の症例から再発ヘルニアに対しては再度その病態を精査するという態度も大切であるということ。又女性の鼠径ヘルニアの内容が内生殖器が多いという性質上悪性の可能性も考え, 術前に十分精査する必要のあること。他疾患, 特に全身疾患も除外する必要があることも大切だと考えた。

12. 最近経験した Brenner tumor of ovary の 3 例

○内田 実, 長谷部孝裕, 内田 一
(内田病院)

比較的まれな充実性卵巣腫瘍で 1907 年 Oophoroma follicular として Brenner が 3 例を報告して以来, 本邦では, 充実性卵巣腫瘍の 0.9% を占めておりまれな卵巣腫瘍とされております。内田病院では過去 6 年間に 6 例の Brenner 腫瘍を経験しており, つい最近経験した症例を加えて検討してみた。第 1 症例は出血, 第 2, 第 3 症例は腹部腫瘤感を訴え発見されておりますが, 一般的には偶然子宮筋腫として手術される場合が多いとされております。術後病理組織標本では, 核の長軸に沿って grooving を有する Coffee bean と呼ばれる特徴を有し典型的な Brenner 腫瘍の組織像と一致しておりました。6 例のうち特に 1 例 Proliferative Brenner tumor を含めて報告します。

13. 異型絨毛上皮増殖 (絨腫と断定できぬもの) 症例の検討

○内田 一, 長谷部孝裕, 内田 実
(内田病院)

絨毛性腫瘍は, 絨毛上皮腫, 破壊奇胎, 胞状奇胎, 胎盤ポリープ, 絨毛性内膜炎などに大別されるが, これらの区分がさだかでないものに遭遇することが, 時たまある。最近, 経験した症例を中心にして, 診断基

準は、癌や肉腫は組織学的検索のみで断定することはできるが、一方絨腫は、細胞の異型、転移の有無及び他の臨床症状をも重要な診断参考となる。

14. アミラーゼ産生卵巣癌と推定された症例

○高橋義弘, 荒谷穰治, 林 恵子
飯田和質

(金大産婦人科, 福井県立病院産婦人科)

今回、私達は高アミラーゼ血症を伴った卵巣癌を経験し、検索の結果同症例をアミラーゼ産生卵巣癌と推定した。

症例は52才主婦で、57年に右卵巣腺癌と診断され、59年腔断端部等で再発が認められている。

本症例の高アミラーゼ血症が唾液腺型分画の増量によるものであること、卵巣癌の再発である腔断端部腫瘍のホモジェネートでアミラーゼ活性が異常に高値であること、治療により血中アミラーゼ値の減少がみられ、その推移と臨床経過との間に相関が認められたこと、以上より、本症例をアミラーゼ産生卵巣癌と推定した。診断を確実にするため、組織学的に腫瘍細胞内にアミラーゼが存在していることを確認すべく、現在検討中である。

15. 卵巣癌症例の画像診断

○出嶋秀明, 松田春悦

(金大産婦人科, 敦賀市立病院産婦人科)

Lately, five patients with serous cystadenocarcinoma of the ovary are diagnosed histopathologically after ultrasonography and/or computed tomography, whose findings denote that heterogenic content prevents us from considering the lesion is benign, even with smooth surface and thin capsule.

16. 乳房検診と乳腺疾患症例検討

○林 恵子, 三輪正彦, 打出喜義
木原順子, 山西久美子, 寺田 督
(金大産婦人科)

昭和49年1月から昭和59年1月までの10年間乳房検診を行なった結果を報告した。集団検診は、2774名、うち3名が乳癌であり、全例ともTiNoMoであった。また外来検診者252名。うち3名が乳癌であり、全例TiNoMoであり、定型的根治乳房切断術を行なった。その他、良性疾患が発見された。Fibroadenomaが18、Fibromaが1、Mastopathyが176、Mastitisが14。その後99名の追跡調査を行なった。その中から症例を紹介した。第1例は、fibroadenoma。

第2例はbreast cancer。第3例はmalignant lymphoma。最後に乳腺疾患の診断法、治療法について述べた。

17. 子宮腔部コンジローマのkolposcopy所見の検討

○荒谷穰治, 高橋義弘, 大森正弘
飯田和質

(金大産婦人科, 福井県立病院産婦人科)

flat con dylomaは、最近その頸癌との関係について注目されています。

今回我々はその、kolposcopy所見について、CISと比較検討したので、報告します。

1) flat con dylomaは非常にcolposcopy上はCISに類似していた。血管が単純で、表面がやや隆起しmosaicの中心が広く突出していた。

2) CISにおけるmosaic病変は、やや粗大で血管がcondylomaに比べて太いと思われた。

3) Condylomaの病理組織は粘膜内にはっきりとした血管が存在していなかった。しかしCISの病理組織には規則正しく血管が存在していた。

18. 当院外来におけるクラミジア感染症について

○荒谷穰治, 加藤三典, 窪田与志
飯田和質

(金大産婦人科, 福井県立病院産婦人科)

我々は、外来患者、144名に対して、モノクローナルの蛍光抗体法によって、クラミジア感染症について検索した。そのうち6名の陽性例が認められたが、光顕による、Papスメア法では単なる、頸管炎所見のみで、特徴的なものはなかった。臨床的所見は陽性例ではっきりとした特徴的所見はなかった。陽性例に関しては、テトラサイクリン系の抗生物質で治療した。

19. 当科におけるクラミジア感染症について

○丹後正紘, 川原領一, 松山 毅
長柄一夫, 荒木重平, 岡部 三郎
(国立金沢病院産婦人科)

STDの一つであるクラミジア感染症がわが国でもかなり蔓延しており、子宮頸管炎、子宮内膜炎、PIDの原因になり、又新生児には出産時の感染によって結膜炎や肺炎の原因になることもわかってきた。Pap. smear及び蛍光標識モノクローナル抗体による直接塗抹標本からの抗原検出法により、感染状況をしらべた。Pap. smearによるクラミジア感染細胞の発見率は新患720例中3例(0.4%)で、この間のヘルペス感染細胞の発見率と同じであった。蛍光抗体法では帯下を

訴えて来院した20例中6例, 下腹部痛を主訴とした10例中1例, 妊娠10ヶ月の妊婦では40例中6例が陽性であった。妊婦の陽性例6例中4例は経腔分娩し, 1ヶ月検診で, 児の結膜炎や肺炎等は指摘されていない。蛍光抗体法で陽性の6例中, Pap. smearでもクラミジアを発見した例は1例のみで, これは細胞診では封入体を有する宿主細胞しか判定出来ないためと考えられる。

第7会場 泌尿器科分科会

第328回 日本泌尿器科学会北陸地方会

一般演題

1. 著明な嚢胞性変化を伴った副甲状腺腺腫の1例
○勝見哲郎, 村山和夫 (国立金沢)
多田 明 (同 放射線科)
渡辺駿士郎 (同 検査部)
2. CT スキャンおよび上皮小体シンチグラフィによる局在診断に有用であった上皮小体腺腫による原発性上皮小体機能亢進症の1例
○平野章治, 美川郁夫, 小橋一功 (厚生連高岡)
龍沢俊彦 (同 外科)
寺田忠史 (金大2病理)
3. 外傷を契機に発見された非癒合性交叉性腎転位の1例
○小林徹治, 島田宏一郎, 黒田恭一 (福井県立)
4. Xanthogranulomatous Pyelonephritis の1例
○西東康夫 (北陸病院)
野々村昭孝 (同 病理)
内藤克輔, 天野俊康 (金大)
5. 経皮的腎尿管切石術における反省点
○秋野裕信, 米田尚生, 岡野 学
磯松幸成, 村中幸二, 蟹本雄右
清水保夫, 河田幸道 (福井医大)
6. Cyclosporine A 投与による腎移植3症例の臨床的検討
○宮崎公臣, 池田彰良, 平田昭夫
藤田幸雄 (藤田病院)
秋田 敬 (同 内科)
高木 弘 (名大2外)
7. 完全重複腎盂尿管に合併せる尿管瘤の2例
○打林忠雄, 国見一人, 山口一洋
川口正一, 大川光央, 久住治男 (金大)
8. Retrocaval Ureter の2例
○宮澤克人, 江原 孝, 谷口利憲

白岩紀久男, 鈴木孝治, 津川龍三 (金沢医大)

9. 泌尿器科領域における NMR-CT の経験
○江原 孝, 山口智正, 工藤卓次
宮澤克人, 笹川真人, 田中達朗
池田龍介, 谷口利憲, 下 在和
白岩紀久男, 鈴木孝治, 津川龍三 (金沢医大)
大口 学, 山本 達 (同 放射線科)
10. 止血困難であった放射線性膀胱炎の2例
○田近栄司, 中村武夫 (富山県立中央)
11. VUR の消失をみた Distal Urethral Stenosis の1治験例
○塚原健治, 南後千秋 (福井赤十字)
12. Detrusor hyperreflexia に対する後部尿道麻酔の効果について
○横山 修, 長野賢一, 川口光平
久住治男 (金大)
13. 排尿障害をきたした悪性リンパ腫の1例
○金田隆志, 小池 宏, 中田瑛浩
片山 喬 (富山医薬大)
14. 前立腺癌腫瘍マーカーとしての γ -Seminoprotein の臨床的検討
○梅田慶一, 風間泰蔵, 秋谷 徹
片山 喬 (富山医薬大)
15. エトポシドを用いた salvage chemotherapy が有効であった睾丸腫瘍肺転移の1例
○竹前克朗, 新田政博, 元井 勇
鈴木都美雄, 田尻伸也 (長野赤十字)
川村信之 (同 外科)
布施春樹 (砺波総合)

第8会場 小児科分科会

第212回 日本小児科学会北陸地方会

一般演題

座長 宮本正俊

1. 頸部腫瘍の治療経験
○太田 淳, 野崎外茂次, 川中武司
梶本照穂 (金医大小児外科)
(指定討論者) 石川県中小児外科 大浜和憲
2. 新生児胃破裂の1極小未熟児例
○林 宏行, 伴登宏行, 北村修一
太田 淳, 大浜和憲, 浅野周二 (石川県中小児外科)
原 健二, 大木徹郎 (同 小児科)
(指定討論者) 福井医大小児科 栗山政憲
3. 画像診断が有用であった外科的炎症性疾患

- 西尾賢昭, 塚原雄器, 南部 澄
和田知久, 梶本照穂 (金医大小児外科)
(指定討論者) 金沢医大小児外科 南部 澄
4. そけいヘルニア術後の情緒反応
—アンケート調査を中心に—
○北谷秀樹, 福田信一郎, 梶本照穂
(金医大小児外科)
(指定討論者) 福井病院小児科 小西 薫
座長 中村凱次
5. 慢性家族性肺炎の1例
○三浦正義, 森尻悠一郎, 高田伊久郎
(富山市民小児科)
宮本正俊, 河本美幸 (同 小児外科)
高橋洋一 (同 消化器科)
小西秀男 (同 放射線科)
(指定討論者) 富山県中小児科 石黒和正
6. エリスロマイシンとフェノバルビタールによると
思われる cholestatic hepatitis の1例
○樋垣泰伸, 谷澤昭彦, 鬼頭敏幸
中川千栄子, 阪口忠彦, 中村凱次
(福井赤十字小児科)
(指定討論者) 富山市民病院小児科 三浦正義
7. HBe 抗原陰性 HBV キャリアー妊婦からの垂直
感染による乳児 B 型肝炎とその HBIG 投与
による予防について
○加藤公孝, 畑崎喜芳, 大井 仁
石黒和正 (富山県中小児科)
(指定討論者) 福井県立小児科 生田敏定
8. 1983 年のエコーウイルス 24 型感染に関する血清
免疫学的所見
○正木明夫 (富山県福光町)
森田修行 (富山県衛生研究所)
諸橋健雄 (富山県富山市)
(指定討論者) 福井県衛生研究所 松本和男
座長 中谷茂和
9. ASD・PDA complex を合併した右肺低形成の 1
例
○豊田貢一, 四家正一郎, 浅井利夫
館 慶三, 森田正人, 徳田成美
刈谷裕彦 (金医大小児科)
(指定討論者) 福井循環器病院外科 大中正光
10. 心内膜線維弾性症の同胞例を含めた 3 例について
○松倉裕喜, 三枝伸子, 佐伯陽子
宮崎あゆみ, 市田蒔子, 岡田敏子
(富山医薬大小児科)
西谷 泰, 藤村光夫 (富山県中胸部外科)
若木邦彦, 肥田高嶺, 小泉富美朝
(富山医薬大第 2 病理)
(指定討論者) 福井循環器病院小児科 浜岡建城
11. 最近のフォロー四徴症の開心根治術
○大中正光, 大橋博知, 堤 泰史
山下成哲, 沢谷 修, 田中 孝
(福井循環器病院外科)
浜岡建城 (同 小児科)
吉岡隆夫, 岡本 力, 石原義紀
(福井愛育病院小児科)
(指定討論者) 福井愛育病院小児科 石原義紀
12. Cardiofacial syndrome の 6 症例
○吉岡隆夫, 岡本 力, 石原義紀
(福井愛育病院小児科)
浜岡建城 (福井循環器病院小児科)
(指定討論者) 金沢医大小児科 森田正人
座長 春木伸一
13. 高 IgM 血症を伴う未熟児の慢性呼吸障害の 3 例
○太田和秀, 久保 実, 沖アロールド
笠原義仁, 村田明聡, 渡辺礼二
大木徹郎 (石川県中小児内科)
(指定討論者) 富山医薬大小児科 嶋尾 智
14. クロウン病の 1 例
○清水 眞, 五十嵐登, 加藤英治
谷口 昂 (金沢大小児科)
(指定討論者) 石川県中小児科 久保 実
15. わが国で初めて化学診断した α -ケトアジピン酸
尿症の 1 例
○新家敏弘, 井上義人, 松本雅裕
久原とみ子, 松本 勇 (金沢医大人類遺伝)
周山逸人, 岡野善行 (大阪市立大小児科)
(指定討論者) 福井医大小児科 須藤正克
座長 佐竹直子
16. 髄膜炎菌性髄膜炎の 1 例
○南 聡, 三浦正義, 森尻悠一郎
高田伊久郎 (富山市民病院小児科)
(指定討論者) 石川県中小児科 大木徹郎
17. 緩慢な経過をたどり, Froin 徴候を認めた astro-
cytoma の 1 例
○額 修, 中川千栄子, 中沢良樹
四家正一郎 (金沢医大小児科)
伊東正太郎, 角家 暁 (同 脳外科)
(指定討論者) 福井医大小児科 小西行郎
18. 登校拒否症児の入院治療の現況
○西川二郎, 井村英一, 山上正彦
本家一也, 村田祐一, 武藤一彦
石川克己 (国療医王病院小児科)
大友順治 (同 児童指導員)

- 齊藤チカ子 (国療北陸病院精神科)
 (指定討論者) 国療富山病院小児科 京谷征三
19. 早期療育を行った“cat cry”症候群の1例
 ○小西 薫, 佐竹直子 (福井病院小児科)
 奈須田潮 (同 理学療法士)
 (指定討論者) 富山医大小児科 小西 徹
 座長 鈴木祐吉
20. 本年4月より開始された福井県下における神経芽細胞腫マス・スクリーニングに関する速報 (同時期に発見された2症例を中心に)
 ○生田敬定, 濱田 泰, 若林正三郎
 清水恒広, 福原君栄, 庭野行雄
 春木伸一 (福井県立病院小児科)
 坂後恒久, 山本勇志
 (福井県小児療育センター)
 堀田正一, 前田喜美恵, 高木靖弘
 松田 漸 (福井県衛生研究所)
 (指定討論者) 金沢医大小児科 額 修
21. 血小板減少性紫斑病を併発したマイコプラズマ肺炎の1例
 中村英夫 (金沢赤十字病院小児科)
 (指定討論者) 福井医大小児科 吉本政弘
22. 水痘罹患中に尿路出血で発症したITPの1例
 ○藤本 巖, 吉本政弘, 小西行郎
 藤沢辰一, 須藤正克 (福井医大小児科)
 (指定討論者) 福井赤十字病院 中川千栄子

第9会場 脳神経外科分科会

第23回 北陸脳神経外科集談会

一般演題

座長 土屋良武 (福井県済生会病院)

1. 破裂脳動脈瘤早期手術例の検討

○村田秀秋, 羽場勝彦, 吉田一彦
 佐藤一史, 藤沢博亮
 (福井県立病院脳神経外科)

過去5年間, 当科においてクリッピング手術を行った破裂脳動脈瘤109例中, 初回発作より3日以内に手術を施行した60例について検討した。年齢は33~77才にわたった。術前の Hunt の Grade は I 4例, II 14, III 24, IV 12, V 6であった。転帰は発症後6ヶ月の時点で於て, 社会復帰45例, 自立可能なもの3例, 日常生活に介助を要するもの4例, 寝たきりのもの0, 死亡8例であった。死亡原因は vasospasm によるもの3例, 初期の脳ヘルニアによるもの3例, 心筋梗塞1例, 肺炎1例であった。術後, 臨床的な vasospasm は36例にみられ, その程度は CT スキャン上の血腫の拡がりに相関した。しかし脳槽ドレナージを行うと同時に,

Swan-Ganz カテーテルを用いて積極的に Hypertension-Hypervolemic therapy を行ない良好な結果を得た。

2. 脳動脈瘤急性期手術例の検討

○佐藤秀次, 鈴木 尚 (金沢脳神経外科病院)
 角家 暁 (金沢医科大学脳神経外科)

破裂脳動脈瘤急性期手術例42例を検討し報告した。年齢: 28~72才, 平均54才。動脈瘤総数は47個で, AcomA 17, ICA 15, MCA 15個。発症24時間以内の手術は35例, 83%。術前 Hunt and Kosnik grade I~IIIは34例, 81%であった。手術は, clipping 後, spasm 防止のため主に両側 A₁・M₁周囲の血腫を除去し, 術後 spasm には volume expansion を行った。9例26%が spasm による症状を呈し, 内7例が脳梗塞を合併した。術前 grade I~IIIの34例中27例, 82%が予後良好, 6例が予後不良であったが, 3例は術後合併した spasm, 残る3例は術前合併した脳内血腫, 脳室内穿破が原因であった。Grade IV・Vの8例は全例予後不良であった。

3. 破裂脳動脈瘤急性期手術

○黒瀬輝彦, 圓角文英, 上原 哲
 (大船共済病院脳神経外科)

破裂脳動脈瘤急性期手術29例の手術成績の予後因子について検討した。手術成績 (Auer), favourable results: 78%, unfavourable results: 22% (mortality 14%), preoperative Hunt & Hess Grade と clinical outcome Grade (Auer) は, よく相関した。Surgical complication は52% (surgical morbidity and mortality は20%) にみとめ, その原因の66%は spatula pressure で, Hunt & Hess Grade III以上 SAH Grade (Auer) の高いものに高率に発生した。Delayed Ischemia は25%に発生し, そのうち29%は予後不良。水頭症は35%に発生し, Hunt & Hess Grade の悪いものに多くみとめた。術後全身合併症は46%にみとめ, 重篤なものは28%であった。結論: ① Grade I~IIIは社会復帰の可能性が高いが, Vでは回復はほとんどみとめない。② Grade III以上では surgical traumaの発生率が高い。脳室ドレナージの併用の他, 今後, 開頭方法, 脳ベラの間けつ的の使用の検討を要する。③術中, 髄液流通の確保と可逆的 SAH の除去, および④合併症の積極的予防につとめる。

4. 破裂脳動脈瘤に対するスパイナルドレナージ法の有用性について

○武内重二, 武部吉博, 宝田勝憲

永谷一彦, 原 靖, 大内雅文
(福井赤十字病院脳神経外科)

急性期破裂脳動脈瘤に対して, 術前より spinal drainage をはじめ, 術後も 7 日間程度続行したところ, (1)ほとんど全例が発作前の状態に復帰し, (2)神経学的, 精神科学的脱落症状を示さず, (3)ときに一過性の軽微な血管攣縮症状を示したのみで, (4)重篤な血管攣縮症状を示さず, (5)70 才以上の老人でも好成績を示したので報告する。

すなわち, 入院日(大抵は発作日)に spinal drainage をおこない, CSF 排液量を 5~10 ml/hr に調節, 翌日(または翌々日)に neck clipping をおこない, ひきつづき spinal drainage を約 7 日間程度おこない, CSF が黄色透明になった時点で抜去する。その結果,

Grade 1: 2/2 例, Grade 2: 9/9 例,

Grade 3: 6/8 例, Grade 4: 1/2 例

Grade 5: 1/3 例で好成績を得た。

又, 70 才以上の老令者 4/6 例が完全に現職に復帰したか, もしくは発作前の状態にもどった。

5. 出血性梗塞で発症した多発性脳動脈瘤の 1 例

○新多 寿, 木谷隆一
(富山労災病院脳神経外科)
山崎隆吉(同 内科)

症例は 71 歳の男性で, 失語と片麻痺を主訴として来院した。軽度の意識障害と全失語, 右不全片麻痺を認めた。頭痛, 嘔気はなかった。心雑音, 頸部雑音ならびに脈不整はなかった。CT で左側頭葉の出血性梗塞を認めた。脳血管写で左右中大脳動脈の分岐部に動脈瘤を認めた。左中大脳動脈瘤は径 11 mm × 8 mm と大きく, 頸動脈, 中大脳動脈には狭窄所見はなかった。動脈瘤クリッピングを施行したところ, 左中大脳動脈瘤のドーム内壁の一部に器質化がみられた。しかしクモ膜下出血はみられなかった。本症では比較的大きな左中大脳動脈瘤内に生じた血栓が栓子となり中大脳動脈分枝を閉塞して側頭葉の出血性梗塞を生じたと考えられた。術後, 血流改善剤のみの投与で再発作を認めず経過は良好である。

座長 岡 伸夫(富山医科薬科大学)

6. 脳動脈閉塞症例に対するウロキナーゼ持続動注の経験

○北沢智二, 寺林 征, 森 宏
杉山義昭(富山県中央病院脳神経外科)

閉塞性脳血管障害急性期症例に対するウロキナーゼ点滴静注法は広く行われているが, 血栓をより効果的に溶解させるためにはウロキナーゼがより高濃度に血

栓部に接触することが重要と思われ, このためには点滴静注法よりも局所持続動注法の方がより効果的と思われる。最近われわれの施設においてもこの方法を試み, 現在迄 6 例に施行しうち 4 例に再開通を認めた。その傾向として, 頸動脈領域よりも中大脳動脈領域の方が, また動脈硬化を基盤とした狭窄や閉塞よりも心原性の塞栓症の方が, そして時間的に発症後できるだけ早期で, CT 上低吸収域がまだ出現していない時期の症例ほど改善が認められているようであった。

7. 脳虚血性疾患における Dynamic CT の有用性

○橋本正明, 宮森正郎, 水腰英隆
山野清俊(富山市民病院脳神経外科)
田代室一, 汁 正樹(同 中央放射線部)

Dynamic Scan により内頸動脈閉塞症, 脳動脈狭窄症例 10 例における局所脳循環動態を検討した。Dynamic CT によって得た Timedensity curve を Gamma-fitting することにより ① EF (Effective width) ② TS (First-movement). ③ TP (Time to Peak) ④ Peak の 4 Parameter を選び, 中大脳動脈及び中大脳動脈領域に ROI を設定し検討した。EF, TS, TP, P ともに患側の遅延, CT 値の低下又は上昇を認めた。中大脳動脈支配領域では, EF, TS が TP より Transit time の意味を含めより病態を反映し, Parameter として有用と思われる。特に IC 閉塞例においては, TP, EF, TS の遅延程度は Willis 輪を介する副血行路の発達状態の判定の目安として有用と思われる。

8. 脳出血急性期例の MR-CT

○倉内 学, 佐藤秀次, 鈴木 尚
(金沢脳神経外科病院)
角家 暁(金沢医科大学脳神経外科)

被殻・視床出血 9 例の MR-CT 所見を CT と対比させ報告した。機種は磁場強度 0.15 テスラ。使用したパルスシーケンスは IR TR 2000/TI 500 と SE TR 2000/TE 80。結果: (1)発症時 CT 上の血腫は, IR で dark halo (DH)をもつ白質同等の bright area (BA), SE では均質な BA として, (2)CT 上 high dense の血腫が周辺に低吸収域を伴う 4~7 日頃は, IR で DH をもつ BA, SE で dark center (DC) をもつ BA として, (3)CT 上高吸収域が縮小する 14 日頃は IR で DC と DH をもつ BA, SE では拡大した BA として描出された。また, (4)CT 上血腫が isodense となる 4 週頃は, IR, SE ともに(3)の pattern のまま縮小した。以上, 脳出血の MR-CT 所見は IR, SE ともに経時的に(1)から(4)へと一定の変化を示した。

9. STA-MCA 手術の合併症としての小脳出血

○宝田勝憲, 武内重二, 武部吉博
永谷一彦, 原 靖, 大内雅文
(福井赤十字病院脳神経外科)

CTA-MCA 吻合術 4 例, 脳動脈瘤 (未破裂) クリッピング術 1 例の術後に生じた小脳出血 5 例を報告した。共通点として, 術前から抗血小板製剤を使用していた事, 既歴に高血圧症や脳虚血症状があった事, 術後抜管時に急激な血圧上昇があった事などがあげられた。興味ある点では, 吻合術を施行した 4 例に, 術側の反対側小脳に血腫形成をきたした事があげられる。予防対策としては, 手術数日前からの抗血小板製剤の中止, 術直後の CT 検査による早期発見も有用と思われるが, 術前後の厳重な血圧管理こそが予防の最重要点と思われる。

10. 両側 STA-MCA 吻合術を施行した成人型モヤモヤ血管の経時的変化について

○大井政芳, 佐藤秀次, 鈴木 尚
(金沢脳神経外科病院)
高久 晃 (富山医科薬科大学脳神経外科)

出血型モヤモヤ病の成人例に対して両側 STA-MCA 吻合術を施行した。術後 3 年 3 ケ月の経過観察では, 脳虚血症状及び再出血は認めなかった。脳血管撮影は術後 1 ヶ月以内, 1 年後, 2 年後, 3 年後の計 4 回行い, その経時的変化を追跡した。術後 1 年以内に両側の中大脳動脈皮質枝領域はバイパスによって灌流され, 基底核部モヤモヤ血管はほぼ消失した。しかし前大脳動脈領域の血行動態に変化は見られなかった。1 年以降の追跡では中大脳動脈及び前大脳動脈領域の血行動態に新たな変化は見られなかった。

座長 久保田紀彦 (金沢大学)

11. 多発性髄膜腫の一例

○山本信孝, 富子達史
(高岡市民病院脳神経外科)

多発性髄膜腫の 1 例を経験した。

症例は, 35 歳女性。主訴は頭痛, 左側頭部の頭痛が次第に増強したため来院。神経学的には左嗅覚低下のみ認めた。CT では, 前頭蓋底と左 pterion 内側に著明に造影増強される腫瘍が見られた。血管写では, 外頸動脈からの tumor stain が認められた。手術で, 左側頭部 2 個, 嗅窩部 1 個の腫瘍を摘出した。左側頭部の 1 個は骨に浸潤していた。組織はすべて同じ meningocytic meningioma で悪性像はなかった。

本症例では Von Recklinghausen 病を思わせる身体所見や家族歴はなく, 3 個の腫瘍もそれぞれ独立し

ていることから Cushing らの多発性髄膜腫の定義に合致する。

12. 三叉神経痛および顔面けいれんを呈した小脳橋角部髄膜腫の 1 例

○西方 学, 岩井良成, 岡 伸夫
高久 晃 (富山医科薬科大学脳神経外科)

三叉神経痛および顔面痙攣を伴った, 小脳橋角部髄膜腫を経験したので報告する。

症例は, 62 才女性。15 年程前に左三叉神経痛と診断され, アルコールブロックを施行され, 症状は消失していた。ところが, 5 年前に再発し, 2 年前よりさらに, 左聴力低下, 昨年来より左顔面痙攣が出現した。CT scan にて, 左小脳橋角部に異常を指摘され, 昭和 60 年 2 月 18 日当科へ入院した。諸検査にて, 組織学的に小脳橋角部腫瘍として, 手術を施行し, 髄膜腫と診断された。

本症例においては, 小脳橋角部髄膜腫が増大し, 三叉神経並びに顔面神経の intra-exit zone を圧迫したものと推定された。

13. 神経鞘腫と髄膜腫に合併した胸髄腫瘍

○糸氏 亨, 池田清延, 久保田紀彦
山本信二郎 (金沢大学医学部脳神経外科)

症例は 48 才の女性で, 両側の聴力消失を訴え, 1965 年両側聴神経鞘腫全摘術を受けた。1980 年より両側顔面神経麻痺が出現したため, 1982 年両側聴神経鞘腫全摘術を受けた。今回両下肢筋力低下及び知覚障害を主訴に入院した。神経学的には両側聴力消失, 両側顔面神経麻痺, Th4 以下の全知覚低下, 両下肢筋力低下, 排尿障害を認めた。CT と脊髄造影にて Th1~3 と Th5 の 2 箇所脊髄腫瘍がみられたため, 摘出手術がなされた。組織学的には, Th1~3 の腫瘍は神経鞘腫 Th5 の腫瘍は髄膜腫であった。術後, 3 年前の頭蓋内腫瘍を再検索した所, 神経鞘腫の中に髄膜腫細胞群と Psammoma body を発見した。本症例は遺伝歴, Café au lait spot, 皮下腫瘍に neurofibroma の 3 者を認めず neurilemmomatosis と確診した。又, 頭蓋内腫瘍の組織像より髄膜腫と神経鞘腫の腫瘍細胞の類似性が推測された。

14. 悪性化像を呈した両側聴神経腫瘍の 1 剖検例

○宮森正郎, 橋本正明, 水腰英隆
山田清俊 (富山市民病院脳神経外科)
高柳尹立 (同 研究検査科)
杉野 実 (杉野脳神経外科病院)

Malignant schwannoma は, 普通, 四肢, 軀幹, 頸

部などの末梢神経に発生し、脊髄や脳神経に発生する事はきわめて稀であるとされている。今回、我々は、両側聴神経腫瘍が悪性像を呈し、特に左側で悪性性格が強く、髄液腔内に播種して両側脳室壁に転移したと考えられる1剖検例を経験した。malignant schwannomaが髄液腔内に播種した例は文献的には1例の報告があるのみであり、本例も貴重な症例と思われたので報告した。

15. 側脳室内腫瘍の1症例

○染矢 滋, 木下 昭
(市立小松総合病院脳神経外科)

最近我々は、左側脳室前角に発生した multiple cystic subependymoma の1例を経験したので報告する。症例は65才女性、低血糖発作で来院した。頭部CTスキャンにて、左側脳室前角に高吸収、同体部に等、低吸収像を示す球状のmassを認め、増影剤投与により軽度の増強効果を見た。脳血管写では腫瘍血管は認めず、血液生化学的検査、内分泌学的検査でも異常を認めなかった。左前頭頭頂開頭、trans cellosal approachにより左側脳室前角に達し、腫瘍摘出した。術後、一過性に自発性低下、矢見当識が出現したが短期間に回復し、手術による後遺症はなかった。標本による組織学的検索では fibrillar matrix がみられ、subependymoma の像であった。

座長 武内重二 (福井赤十字病院)

16. 約1年にわたり繰り返す腫瘍内出血を起こした mixed glioma の1例

○竹内文彦, 中村 勉, 伊東正太郎
佐々木尚, 東 徹, 郭 隆王
角家 暁 (金沢医科大学脳神経外科)

38才女性。左前頭葉腫瘍の亜全摘術を行い mixed glioma と診断された。術後局所に4000 rad 照射したが、4年後に再発し2回目の亜全摘術を行った。発症6年目のCTで腫瘍の再発と腫瘍内出血と思われる高吸収域を認め、再び4000 rad の局所照射を行った。死亡前の1年間、腫瘍内高吸収域の範囲及び部位が5回以上変化した。更に左側脳室にも高吸収域が出現し約半年間消失することはなかった。剖検にて腫瘍内と脳室内に血腫を認め、組織所見で腫瘍内に散在する出血巣と蛇行した小血管壁の硝子化変性が見られた。出血凝固系に異常なく出血は異常血管の脆弱性に起因すると考えたが、血管の脆弱化は放射線による変性が腫瘍自体の変性が断定できなかった。

17. 原発性悪性黒色腫の1例

○廣瀬敏士, 白崎直樹, 辻 哲朗
兜 正則, 河野寛一, 伊藤治英
林 実 (福井医科大学脳神経外科)
杉原洋行 (同 第1病理)

症例は77才男性。昭和60年5月下旬より全身倦怠感と咳嗽が出現し、6月10日より左側頭部痛が加わった。以後、意識レベルは徐々に低下し痙攣発作もみられたため、当科へ転院した。

入院時、昏迷状態で、瞳孔不同(左>右)、左眼瞼下垂、右不全片麻痺、項部硬直を認めた。また、左眼瞼周囲から頭頂側頭部、左眼球結膜に褐色の色素斑を認めた。頭部CTにて、左中頭蓋窩に、境界明瞭で、一様な enhance 効果を受ける腫瘍を認めた。血管造影では、腫瘍血管、腫瘍陰影、血管の偏位を認めた。

外科的切除術、化学療法(DTIC, ACNU, Vincristin の3剤併用)施行するも、術後3週目に死亡した。剖検にて、他臓器の黒色腫を認めず、脳底から全脊髄に及ぶ播腫性病変を認めた。

18. 悪性脳腫瘍に対する MCNU-Cisplatin-VEPA 療法の有用性について

○武部吉博, 武内重二, 宝田勝憲
永谷一彦, 原 靖, 大内雅文
(福井赤十字病院脳神経外科)

〔目的〕悪性脳腫瘍9例に Cisplatin-MCNU-VEPA 併用療法を試み、その有用性を確認したので紹介する。

〔方法〕手術で到達可能であった6例については術後全身状態の回復をまって、また到達不可能な3例は放射線学的診断後早期に化学療法を開始した。Cisplatin 20~40 mg, VEPA (Vincristine 1 mg, Endoxan 400 mg, Adriamycin 30 mg, Prednine 40 mg) の両者を7日間隔で、3~5回繰り返し1クールとした。MCNU 50 mg は1度のみ施行し、セルジンガー法にて内頸動脈又は椎骨動脈に注入した。〔結果〕CR: 2例, PR: 3例, NC: 1例, PG: 3例であった。〔結論〕外来加療も可能な化学療法として Cisplatin-MCNU-VEPA 併用療法は臨床的に有効である。

19. 巨大頭皮下腫瘤を呈したレックリングハウゼン氏病の1例

○塚田 彰, 沖 春海
(黒部市民病院脳神経外科)

症例は49才女性。家族歴に特記すべきことなし。19才頃に後頭部腫瘤に気付いたが放置していた。以後徐々に腫瘤は増大し下垂するようになった為当科に入院した。後頭部に巨大皮下腫瘤、背部、腰部、殿部に

大小のカフェオレ斑及び結節状皮膚腫瘍がみられた。神経学的異常所見はなく知能も正常。頭部単純写、骨スキャンでラムダを中心に骨欠損があった。CT で後頭部皮下腫瘍は軽度エンハンスされ、脳スキャンで同部に異常集積像を認めた。脳血管写で異常所見なし。摘出した腫瘍の組織診断は神経線維腫であった。以上よりレックリングハウゼン氏病と診断した。同疾患は巨大腫瘍を呈することがあり、その典型例が elephantiasis である。また悪性化や悪性腫瘍の合併も知られており、摘出した標本の組織学的検索が必要である。

座長 村田秀秋 (福井県立病院)

20. 広範囲硬膜切除により治癒した石灰化慢性硬膜下血腫の1例

○北林正宏, 北嶋哲盛, 山本信二郎
(金沢大学医学部脳神経外科)

症例は75才男性。主訴は歩行障害。CT及び頭蓋断層撮影にて石灰化慢性硬膜下血腫と診断し広範囲開頭術を行った。外膜は厚く固く易出血性であった。血腫内容は全て粘土状であった。内膜も厚く固く、表面よりoozingが認められた。外膜及び内膜の標本では、血腫との境界部に石灰化と共に壁の薄い血管が多数認められた。術後経過良好だったが、5日目に症状及びCT上の再発を認め再手術を行った。骨窓を追加し、血腫除去と被膜の止血を充分に行った。2回目手術後は再発もなく独歩可能となり家庭復帰している。

石灰化慢性硬膜下血腫の治療については広範囲開頭術による粘土状血腫の可及的除去、外膜の広範切除、内膜表面の充分な止血が重要であると考えられた。

21. 頭部外傷におけるDIC

○濱田秀剛, 谷一彦, 早瀬秀男
土屋良武 (福井県済生会病院脳神経外科)

過去3年半の頭部外傷III・IV型142例のうち11例(7.7%)にDICが発生した。DIC11例については、Glasgow coma scale (GCS) と FDP に相関があり、GCSが低いほどFDPは高かった。血小板数、フィブリノーゲン・PTにはGCSとの相関はなかった。

DICの発生率は重症群(GCS 3~8)で17.4%と中等症群(GCS 9~12)3.8%、軽症群(GCS 13~15)2.9%に比べ有意に高かった。また死亡群では20.8%にDICが発生し、生存群の5.1%に対し高率であった。CT上で重症脳挫傷を呈した群では13.3%と比較的高率にDICの合併が見られた。

DIC全例にヘパリン(10,000~20,000単位/日)による治療を行ったが、合併症はなかった。

22. パラボラアンテナによる経眼窩穿通創の1例

○熊橋一彦, 徳田和彦, 北村住久
駒井杜詩夫 (厚生連高岡病院脳神経外科)

症例は23才の男性。1985年2月23日駐車場にてマスプロアンテナで右眼を受傷した。自らアンテナを引き抜き、倒れているのを発見され当科に入院した。入院時、意識レベルは10で鼻出血があり、頭部単純写真、CTにて著明な気脳症を認めた。受傷4時間後には、対側前頭葉内に出血を認めた。受傷4日目に髄液鼻漏を生じ、安静にても鼻漏は持続するため、髄液鼻漏閉鎖術を施行した。術後軽度の鼻漏と髄膜炎を併発したが軽快した。本症例の頭蓋内へのアンテナの進入経路は、眼球を避けて眼窩内に入り、視神経と外眼筋群の間を通り、orbital roofを突き抜け、対側前頭葉に達したものと思われた。脳室内の多量の空気は、cistern内の空気の逆流によるものか、あるいは、アンテナが直接左前角に達しており流入したものと考えられた。

23. 重症SAHの母親から極小未熟児で誕生した新生児に合併した脳内出血後水頭症の1例

○木村明, 石黒修三, 宗本滋
正印克夫, 二見一也
(石川県立中央病院脳神経外科)

母親は31才、2回目の妊娠8ヶ月(29週)時にL-ICPC動脈瘤破裂をきたし、肺水腫を合併したため、帝王切開で1380gの未熟児を分娩した。

患者は、Apgar scor 1分1点、5分3点で、Bomssel III型のRDSを呈し、日令5に脳室上皮下出血(SEH)、脳室内出血(IVH)を合併した。脳室拡大は進行性で、PVL様所見も認められ、RI cisternographyでNPH様水頭症と診断され、日令44でV-P shuntを施行した。その後の患者の成長は順調で、CT所見も改善され母子共に退院したが、日令136のCTで再び脳室拡大が認められた。RI cisternography, Metrizamide脳室造影では、髄液循環は正常化しており、CT所見はSAH後のVentriculomegalyと思われた。

未熟児IVH後水頭症の発生には、種々の脳の未熟性が関与するものと思われた。

座長 中村勉 (金沢医科大学)

24. 頸髄損傷後のsleep-apneaの1例

○半田裕二, 石井久雅, 野口善之
古林秀則, 伊藤治英, 林実
(福井医科大学脳神経外科)

症例は20才男性。受傷直後より呼吸停止、四肢完全麻痺を認めた。受傷3日後より自発呼吸の出現、5日後より四肢自発運動の出現を認めた。受傷4週間後に

は、四肢不全麻痺、C₄以下痛覚脱失、触覚低下を示し、覚醒時には自発呼吸による換気量は充分となったが、夜間睡眠時には呼吸困難の為に補助呼吸装置を必要とした。入眠時のポリグラフによる観察では脳波上の睡眠時所見に一致して約1分間の無呼吸とそれに続く覚醒反応と呼吸の再開をくり返す周期的パターンを示した。Diazepamの投与は同様に周期的無呼吸パターンを示し、三環系抗うつ剤の投与は睡眠時無呼吸の出現を減少させたが、呼吸障害を改善することはできなかった。本症例における sleep-apnea は、高位頸髄あるいは延髄の automatic respiratory system が障害され出現したものと推定された。

25. 一側性黄色靭帯骨化症の1例

○阿部 浩, 江守 巧
(水見市民病院脳神経外科)
郭 隆王, 角家 暁
(金沢医科大学脳神経外科)

OYLの報告は現在まで700例以上もみられるが、一側性のOYLは極めて稀である。今回、一側性OYLの一例を経験したので報告する。75才女性。主訴は歩行障害。間歇性跛行の既往があった。両下肢脱力感が起こり、約2日の経過で歩行不能となった。神経学的には腸腰筋以下の右側に強い対麻痺を認めたが、知覚障害はなかった。ミエログラフィー上、第10・11胸椎間に左背側からの硬膜外腫瘤による不完全ブロックを認め、腫瘤のCT値は300-700であり、一側性OYLの診断下に第10胸椎と第9・11胸椎の一部を椎弓切除し、OYLを全摘した。約2週間で歩行可能となった。組織学的には右側の石灰化・骨化の所見はなく、左側のみの胸椎OYLと診断した。

26. Thoracic outlet syndrome の1症例

○立花 修, 石倉 彰
(国立金沢病院脳神経外科)

保存的治療が無効で、日常生活に支障のある胸郭出口症候群の1例に対し手術を施行し、改善が認められたので若干の考察を加え報告する。

症例：45才男性。外傷の既往があり、左上肢外転位にて尺側に強いしびれ、痛みをおぼえ日常生活に支障をきたすようになった。血管写にて左鎖骨下動脈の圧迫所見を認め、保存的に治療するも軽快せず、手術に踏みきった。手術は、前、中斜角筋切離、第1肋骨部分切除術をおこなった。術中、左上腕を過外転位に保持し、肋鎖間隙の可及的拡大をはかった。本例では、術前の血管写にて、左上腕の過外転位に加え、患者の自発的頭位挙上による頸胸筋緊張が圧迫部位決定に有

効であった。また肋骨切除に際し、術中、左上腕肢位を諸種変化させることが肋鎖間隙の圧迫を十分除去するのに必要であった。

27. 頸椎手術用鋭匙の小工夫 -Technical note-

○長谷川健, 大日方千春, 柏原謙悟
山本信二郎 (金沢大学医学部脳神経外科)

頸椎前方経路手術に用いられる鋭匙に小工夫を加えた。鋭匙頭部(tip)の刃先を従来の縦長楕円("dolichocephalic")から横長楕円("brachycephalic")とし、長軸で4, 5, 6 mm(No.00, 0, 1に相当)のサイズを用意し、shaftを細く長く全体長で26 cmとした。tipのneckにstraightとangledの2種があり、前者ではshaftの遠位5 cmを10°angled-downさせた。これら"brachycephalic"鋭匙では従来の鋭匙に比べ、tipの刃先の視野がよく確保される、緩い凹面を呈する椎体面に刃先がよくfitするため有効な刃面が多く、かつangled shaftでも回旋や捻れの少ない安定した操作が可能であった。これらの利点から、顕微鏡下頸椎前方経路手術の、特に椎間後方1/2から1/3の奥深い手術野で有効な使用経験を得た。

第10会場 眼科分科会

1. 涙液内グルタチオン濃度に与える薬物点眼の影響

○開 繁義, 石田俊郎, 山田祐司
中村泰久 (富山医薬大眼科)

2. 当教室における眼外傷の統計的観察

その3. スポーツ外傷

○松本純一, 大山充徳, 都筑春美
中泉裕子 (金沢医大眼科)

3. 北陸地方における失明原因に関する統計的検討

窪田靖夫 (富山医薬大眼科)

4. EOGにおけるContralateral effect (Cross-talk)の評価

○田村敏博, 河崎一夫, 米村大蔵
(金沢大眼科)

5. パターン反転刺激による人眼ERG(その2)

○太田秀俊, 田村敏博 (金沢大眼科)

6. 下斜筋過動を伴った内斜視の術後両眼視機能の検討

○安井紫都子, 向井圭子, 狩野晴子
渡辺のり子, 中泉裕子 (金沢医大眼科)

7. 眼科領域におけるNMR-CTの応用 その2

○山秋 久, 葉 隆一, 小島正美
佐々木一之 (金沢医大眼科)

8. 原発性閉塞隅角緑内障に対するアルゴンレーザー虹彩切開術の治療成績

- 古村俊人, 辻口玲子, 浅井源之
越生 晶 (厚生連高岡病院眼科)
9. WaR 陽性の続発性緑内障の1例
○高原嘉一, 熊谷愛子 (高岡市民病院眼科)
森田嘉樹 (福野町)
10. 後房レンズ挿入術後に発生する虹彩炎の予防法
升田義次 (富山市)
11. Myotonic dystrophy の1症例
○向井圭子, 結城 泰, 山村敏明
(金沢医大眼科)
12. 血糖コントロールと糖尿病性網膜症についての一
考察
○松原広樹, 小嶋一見, 清水葉子
斎藤 裕 (福井医大眼科)

第11会場 整形外科分科会

第96回 北陸整形外科集談会

一般演題

1. 下腿骨遠位端骨折の治療経験
○大野賢朗, 三浦宏之, 岡田俊治
(福井県済生会病院整外)
2. 踵骨々折の経験 (その1)
○三秋 宏, 大場 昭, 加藤日出治
川北 篤, 木嶋光仁, 近藤 啓
重信弥八, 中谷欣二, 波多野茂
広瀬鎮郎, 細川外喜男, 森川幹久
米沢繁男 (金沢市開業医会)
3. 小児大腿骨々折の治療経験
○扇谷一郎, 北野喜行, 藤田国政
(市立砺波総合病院整外)
4. 若年者の陳旧性大腿骨頸部内側骨折に血管柄付き
骨移植術を施行した1例
○野村 忠, 樋口雅章, 沢田米造
中条正博, 五十嵐一郎, 堀本孝士
(富山県立中央病院整外)
島 巖 (石川県立中央病院整外)
吉村光生 (福医大整外)
5. 有痛性二分膝蓋骨の治療経験
○平井 純, 一前久芳, 菅原洋一郎
川北 哲, 竹多外志 (国立金沢病院整外)
6. 歩行分析 —その1. 正常者について—
○野口哲夫, 長尾竜郎, 清水美恵子
島田一郎
(富山県高志リハビリテーション病院)
7. ガングリオンによる棘下筋単独麻痺の1例
○国下正英 (市立小松総合病院整外)
山内茂樹, 米澤幸平 (金大整外)

8. 整形外科的治療を要した Kasabach-Merritt 症候
群の2例

○村田 成, 西島雄一郎 (金医大整外)

日整会教育研修講演

変形性股関節症の治療

近畿大学整形外科 田中清介 教授

9. 高度大腿骨頭沁り症の1治験例
○片山 元, 手井喜久男, 天谷信二郎
増山 茂 (富山市民病院整外)
10. 白血病に対する骨髄移植後に発生した多発性無腐
性骨壊死の1例
○中橋謙次, 宗広忠平, 松本志美
米澤幸平 (金大整外)
塩原信太郎 (金大3内)
11. 変股症に対する寛骨臼回転骨切り術
○田中義孝, 井村慎一, 中瀬裕介
(福医大整外)
12. 最近経験した若年者化膿性椎間板炎の2例
○土屋弘行, 武田正典, 菊地 豊
五之治行雄 (福井県立病院整外)
13. 多発性脊髄神経鞘腫の2例
○糸川秀人, 富田勝郎, 浜岡寛士
野村 進 (金大整外)
武田正典 (福井県立中央病院整外)
14. 頸髄症を呈した頸椎々間板ヘルニアの1例
○池田和夫, 山田義夫 (市立敦賀病院整外)
15. 特異な転位を示したリウマチ性上位頸椎亜脱臼の
1例 (環椎後方転位, 側方傾斜)
○石原裕和, 上田 剛, 高桑一彦
伊藤達雄 (富山医薬大整外)
16. 腰椎々間板ヘルニアに対する lumbar epidural
venography の経験
○増山 茂, 手井喜久男, 天谷信二郎
片山 元 (富山市民病院整外)
17. 後方 Kantenabtrennung の検討
○中村一誠, 富田勝郎, 梅田真一郎
馬場久敏, 吉水典彰, 米澤幸平
(金大整外)
島 巖 (石川県立中央病院整外)
宮崎憲太郎 (公立羽咋病院整外)
松原藤継 (金大中検)

第12会場 外科分科会

第202回 北陸外科学会

一般演題

座長 大中正光 (福井循環器病院外科)

1. 当科における合併症を伴う虚血性心疾患の外科治療

○榊原直樹, 川筋道雄, 川尻文雄
青山剛和, 九沢 豊, 遠藤将光
向井恵一, 三崎拓郎, 岩 喬
(金大1外)

2. サーモグラフィーによる冠血行再建術の評価

○金戸善之, 会田 博, 坂本 滋
湯浅幸吉, 白川尚哉, 豊田恒良
成田久仁夫, 長末正己, 保坂浩史
安西吉行, 岩波 洋, 松原純一
清水 健 (金医大胸部外科)

3. Fontan 型手術の2治験例

○堤 泰史, 大中正光, 大橋博和
山下成哲, 沢谷 修, 浜岡建城
田中 孝 (福井循環器病院外科)

4. Cardiac Cachexia を伴った心房中隔欠損症, 三尖弁閉鎖不全症の1治験例

○白川尚哉, 会田 博, 豊田恒良
坂本 滋, 湯浅幸吉, 金戸善之
成田久仁夫, 長末正己, 保坂浩史
安西吉行, 岩波 洋, 松原純一
清水 健 (金医大胸部外科)

5. 教室における人工弁置換術遠隔成績の検討

○会田 博, 坂本 滋, 湯浅幸吉
金戸善之, 白川尚哉, 豊田恒良
成田久仁夫, 長末正己, 保坂浩史
安西吉行, 岩波 洋, 松原純一
清水 健 (金医大胸部外科)

6. Integral monostrut Björk-Shiley 弁の使用経験

○豊田恒良, 会田 博, 坂本 滋
湯浅幸吉, 金戸善之, 白川尚哉
成田久仁夫, 長末正己, 保坂浩史
安西吉行, 岩波 洋, 松原純一
清水 健 (金医大胸部外科)

座長 石原 浩 (福井医大第2外科)

7. 急性上行大動脈解離に対する緊急手術の検討

○松尾浩三, 藤村光夫, 西谷 泰
戸島雅宏, 河田政明, 清崎浩一
中川禎二, 前田昭治
(富山県中胸部循環器外科)

8. 消化器癌と腹部大動脈手術の合併: 11例の検討

○横川雅康, 上山武史, 明元克司
大場泰良, 湖東慶樹, 永井 晃
富川正樹, 山本恵一 (富山医大1外)

9. 当科における腹部大動脈瘤の経験

○井隼彰夫, 山森祐治, 藤井秀則
林 茂, 井上 茂, 野浦 素
森本秀樹, 秋田利明, 小林 彰
加藤佳典, 丸橋和弘, 千葉幸夫
石原 浩, 谷川允彦, 村岡隆介
(福井医大2外)

10. Transmicroscopic vascular surgery による下腿3分枝血行再建の有用性

○富川正樹, 永井 晃, 宮沢秀樹
橋本英樹, 山口敏之, 鈴木 衛
浜中英樹, 上山武史 (富山医大1外)

11. カテーテルによる深部大腿動脈内異物除去の1例

○保坂浩史, 会田 博, 坂本 滋
湯浅幸吉, 金戸善之, 白川尚哉
豊田恒良, 成田久仁夫, 長末正己
安西吉行, 岩波 洋, 松原純一
清水 健 (金医大胸部外科)
永守郁夫 (浜野病院外科)

12. 顕微鏡手技により成功した膝窩動脈足背動脈バイパス術の1例

○宮沢秀樹, 品川 誠, 寺中正昭
(城端厚生病院外科)
富川正樹, 上山武史 (富山医大1外)
座長 永井 晃 (富山医大第1外科)

13. 肺動静脈瘻6例の手術知見

○花立史香, 皆川真樹, 山下良平
木元春生, 渡辺洋宇, 岩 喬
(金大1外)
五十嵐厚 (同 1内)

14. 肺 Castleman lymphoma の1例

○河田政明, 清崎浩一, 松尾浩三
戸島雅宏, 西谷 泰, 中川禎二
藤村光夫, 前田昭治
(富山県中胸部循環器外科)
北川正信 (富山医大病理)

15. Delayed primary operation で切除し得た胸部神経節芽腫の1例

○島多勝夫, 山下芳朗, 加藤 博
田沢賢次, 伊藤 博, 藤巻雅夫
(富山医大2外)

16. Unilateral hyperlucent lung の所見を呈した気管支平滑筋腫の1治験例

○草島義徳 (富山市民病院呼吸器外科)
北林一男, 堀地 肇, 菅原昇次郎
萩野 茂, 石黒信彦, 広野禎介
(同 外科)
中村祐行, 水上陽真 (同 呼吸器科)

- 小西秀男, 杉原政美 (同 放射線科)
高柳尹立 (同 研究検査科)
能登啓文, 藤田秀春 (金大2外)
17. 心筋梗塞に合併した肺癌の1手術例
○高嶋義光, 江崎 寛, 武藤 真
長谷光雄 (福井赤十字病院呼吸器科)
池田一雄, (同 麻酔科)
山岸利栄 (同 内科)
18. 非肺癌肺腫瘍の検討
○黒田 譲, 大平政樹, 浅田康行
林外史英, 飯田善郎, 三井 毅
三浦将司, 藤沢正清 (福井県済生会病院外科)
19. 全膈胸腔閉鎖法としての胸郭形成術とAir
Plombage法の比較検討
○成田久仁夫, 岩波 洋, 安西吉行
長末正己, 胡 永校, 豊田恒良
白川尚哉, 保坂浩史, 金戸善之
湯浅幸吉, 坂本 滋, 会田 博
松原純一, 清水 健 (金医大胸部外科)
座長 木下 元 (福井医大第1外科)
20. Superior Mediastinal Syndromeを呈した巨大
異所性甲状腺腫の1手術治験例
○山森祐治, 井隼彰夫, 千葉幸夫
村岡隆介 (福井医大2外)
21. 甲状腺癌の上縦隔進展例の手術経験
○萩野 茂, 北林一男, 堀地 肇
菅原昇次郎, 石黒信彦, 広野禎介
(富山市民病院外科)
草島義徳, (同 呼吸器外科)
杉原政美 (同 放射線科)
高柳尹立 (同 研究検査科)
22. 特異な悪性乳腺葉状嚢胞肉腫の1例
○高野 徹, 津田基晴, 稲田章夫
龍村俊樹, 山本恵一 (富山医薬大1外)
塚田貞夫 (金医大形成外科)
若木邦彦 (富山医薬大第2病理)
23. 再発乳癌も含めた両側乳癌症例の検討
○大戸 司, 政岡陽文, 勝木茂美
石田哲也, 橋本哲夫, 上野桂一
喜多一郎, 黒田吉隆, 辻 政彦
(富山県中外科)
北川正信, 三輪淳夫, 増田信二
(富山医薬大第1病理)
座長 能登啓文 (金大第2外科)
24. いわゆる食道癌肉腫の1例
○白崎 功, 山田 明, 加藤 博
佐伯俊雄, 穂苅市郎, 小田切治世
- 島崎邦彦, 坂本 隆, 宗像周二
真保 俊, 唐木芳昭, 田沢賢次
伊藤 博, 藤巻雅夫 (富山医薬大2外)
25. 食道アカラシアの患者に発生した急性胃拡張の1
例
○榊原年宏, 石坂龍典, 藤田敏雄
広川慎一郎 (新潟県厚生連糸魚川病院外科)
白崎 功, 坂本 隆, 伊藤 博
藤巻雅夫 (富山医薬大2外)
26. 有茎挙上結腸を用いた patching method法によ
る良性食道狭窄手術例の検討
○橋本哲夫, 政岡陽文, 勝木茂美
石田哲也, 上野桂一, 大戸 司
喜多一郎, 黒田吉隆, 辻 政彦
(富山県中外科)
27. 食道癌手術における術後呼吸障害
○大堀 功, 能登啓文, 藤田秀春
桐山正人, 嶋 裕一, 宮崎逸夫
(金大2外)
28. 食道静脈瘤治療の検討
○飯田善郎, 三浦将司, 黒田 譲
林外史英, 浅田康行, 三井 毅
大平政樹, 藤沢正清 (福井済生会病院外科)
座長 津田昇志 (福井県立病院外科)
29. 緊急手術を要した消化管出血症例の検討
○中野泰治, 松木伸夫, 巴陵彦彦
可西右使 (高岡市民外科)
30. 胃腺腫の治療
○倉知 圓, 渡辺公男
(辰口芳珠記念病院外科)
仲井信雄 (仲井病院)
31. 石灰化を伴った胃平滑筋腫の1例
○藤沢克憲, 野手雅幸 (国立鯖江病院外科)
佐野 敦, 十倉保宣 (同 内科)
笠原文和, 松葉 明, 小島靖彦
中川原儀三 (福井医大1外)
細川洋平 (同 第1病理)
32. 胃癌と合併した十二指腸平滑筋腫の1例
○酒徳光明, 吉田政之, 関 征夫
相原一郎 (市立敦賀病院外科)
33. 多発性十二指腸憩室症を合併した胃癌の1例
○宗本義則, 河北公孝, 野田暉夫
(勝山病院外科)
酒井泰征 (同 内科)
34. 術前化学療法 (IHC) が著効であった stage IV胃癌
の1例
○沢口 潔, 浅井 透, 太田孝仁

- 菅 敏彦, 上野雅資, 高橋 豊
北村徳治, 上田 博, 萩野知己
磨伊正義 (金大がん研外科)
座長 関 征夫 (市立敦賀病院外科)
35. 当院における胃癌の治療成績
○石黒信彦, 広野禎介, 萩野 茂
草島義徳, 菅原昇次郎, 堀地 肇
北林一男 (富山市民外科)
36. 胃癌手術症例における肝動脈幹背面リンパ節
(No.8p) の検討
○西村元一, 米村 豊, 藤村 隆
杉山和夫, 嶋 裕一, 松田祐一
片山寛次, 橋本哲夫, 藤井久丈
広沢久史, 山口明夫, 宮崎逸夫
(金大2外)
中嶋憲一, 油野民雄, 久田欣一
(同 核医学科)
37. 大彎側胃癌の検討
○広瀬和郎, 大島俊哉, 福島 弥
磯部芳彰, 関 弘明, 小島靖彦
三輪晃一, 中川原儀三 (福井医大1外)
杉原洋行, 細川洋平, 服部隆則
(同 第1病理)
38. Stage I・II胃癌におけるDNA ploidy pattern
の解析
○杉山和夫, 米村 豊, 藤村 隆
西村元一, 橋本哲夫, 嶋 裕一
沢 敏治, 鎌田 徹, 松田祐一
高嶋 達, 山口明夫, 宮崎逸夫
(金大2外)
座長 川浦幸光 (金大第1外科)
39. 食道浸潤胃癌のX線所見
○萩野知己, 菅 敏彦, 太田孝仁
浅井 透, 上野雅資, 沢口 潔
高橋 豊, 北村徳治, 上田 博
磨伊正義 (金大がん研外科)
40. 胃外性発育を示した胃癌症例の検討
○山田洋己, 高松 脩, 津田宏信
浅井伴衛, 木下睦之, 道場昭太郎
滝田佳夫, 宮田龍和 (国立金沢外科)
渡辺駿七郎 (同 病理検査科)
41. 胃癌剖検症例の臨床病理学的検討
○宮田龍和, 高松 脩, 津田宏信
浅井伴衛, 木下睦之, 道場昭太郎
滝田佳夫, 山田洋己 (国立金沢外科)
渡辺駿七郎 (同 病理検査科)
上野一夫 (富山労災外科)
42. 末期胃癌に対するCisplatin, MMC, UFT, 併用療
法 (CMF療法) の効果
○松木伸夫, 佐久間寛, 沢 敏治
八木雅夫, 萩野 茂, 米村 豊
可西右使, 島 弘三, 小森和俊
吉光外宏, 広野禎介, 宮崎逸夫
(北陸シスプラチン研究会)
43. 悪性腫瘍に対するRadiofrequency波温熱療法の
効果
○藤村 隆, 米村 豊, 鎌田 徹
竹川 茂, 上田順彦, 杉山和夫
西村元一, 宮田龍和, 松田祐一
東野義信, 山口明夫, 泉 良平
宮崎逸夫 (金大2外)
中嶋和喜, 久住治男 (同 泌尿器科)
斉藤泰雄, 高島 力 (同 放射線科)
座長 中泉治雄 (福井県立病院外科)
44. 8年間に及ぶ頻回の下血を繰り返した小腸平滑筋
肉腫の1例
○松本一郎, 古田和雄, 原 和人
安田清平 (城北病院外科)
渡辺駿七郎 (国立金沢病理)
45. 肺原発と思われる転移性多発性小腸癌の1例
○大島俊哉, 福島 弥, 松葉 明
小島靖彦, 中川原儀三 (福井医大1外)
細川洋平 (同 第1病理)
岩堀嘉和 (武生外科内科)
46. 腸合併切除を必要とした急性虫垂炎の検討
○原 和人, 松本一郎, 古田和雄
安田清平 (城北病院外科)
47. 虫垂を探って, 非穿孔性虫垂炎と回盲部周囲腹膜
炎
小林喜順 (福井市小林病院)
48. 当科における緊急手術症例の検討
-特に腸間膜動脈血栓症について-
○谷 卓, 清水康一, 上野一夫
島 弘三 (富山労災外科)
座長 田沢賢治 (富山医薬大第2外科)
49. S状結腸-膀胱瘻の1例
○高橋一郎, 山崎四郎, 羽柴 厚
山脇 優 (市立小松総合病院外科)
亀田健一 (同 泌尿器科)
大井章史 (金大第1病理)
50. 為膜性腸炎の経験例について
○若狭林一郎, 村田修一, 村上 新
明元克司, 清崎克美 (氷見市民外科)
西野逸男 (同 内科)

- 江守 匠, 阿部 浩 (同 脳神経外科)
51. 大腸憩室を合併した虚血性大腸炎の1例
○村田修一, 若狭林一郎, 村上 新
清崎克美 (水見市民外科)
52. 大腸悪性繊維肉腫瘍の1例
○藤井秀則, 林 茂, 井上 弘
野浦 素, 森本秀樹, 加藤佳典
丸橋和弘, 谷川允彦, 村岡隆介
(福井医大2外)
53. 遊離腸管平滑筋移植を付加した人工肛門造設術
○竹森 繁, 新井英樹, 穂苅市郎
鈴木康将, 笠木徳三, 坂本 隆
永瀬敏明, 田近貞克, 唐木芳昭
田沢賢次, 伊藤 博, 藤巻雅夫
(富山医薬大2外)
座長 高島茂樹 (金沢医科大第2外科)
54. 癌化を示した潰瘍性大腸炎穿孔の1例
○片山外一, 北村秀夫 (福井病院外科)
大井章史, 勝田省吾 (金大第1病理)
55. 当院における大腸癌症例の検討
○古田和雄, 松本一郎, 原 和人
安田清平 (城北病院外科)
56. 大腸癌再発症例の検討
○北村徳治, 太田孝仁, 浅井 透
菅 敏彦, 上野雅資, 沢口 潔
高橋 豊, 上田 博, 荻野知己
磨伊正義 (金大がん研外科)
57. 直腸癌前方切除再発症例の検討
○笠原善郎, 新谷寿久, 清水淳三
石黒栄紀, 小杉光世, 小林 長
(市立砺波外科)
角田清志 (同 放射線科)
荒川竜夫 (同 胃腸科)
安念有声 (同 病理)
58. 大腸癌卵巣転移症例の検討
○小林泰三, 磯部芳彰, 新本修一
松葉 明, 木下 元, 小島靖彦
三輪晃一, 中川原儀三 (福井医大1外)
細川洋平 (同 中検病理)
59. 消化器癌の肝転移例の予後
○伴登宏行, 川浦幸光, 森 善裕
橋爪泰夫, 魚津幸蔵, 疋島 寛
竹村博文, 広瀬宏一, 岩 喬
(金大1外)
座長 小西孝司 (金大第2外科)
60. 脾動脈瘤を伴った肝硬変合併肝癌の1例
○藤村 隆, 泉 良平, 藪下和久
渡辺俊雄, 小野田秀樹, 広沢久史
小西孝司, 宮崎逸夫 (金大2外)
61. リンパ節転移による上腹部腫瘤により発見された
微小肝細胞癌の1例
○金 定基, 八木真吾, 皆川真樹
石田一樹, 清原 薫, 牛島 聡
北川 晋, 中川正昭, 瀬川安雄
(石川県立中消化器外科)
清水博志 (同 放射線科)
林 守源 (同 病理)
松原藤継 (金大中検病理)
前田敏男 (映寿会病院)
62. 原発性肝癌の動注化学療法の検討
○渡辺俊雄, 泉 良平, 前田基一
上田順彦, 藪下和久, 小野田秀樹
西村元一, 広沢久史, 宮崎逸夫
(金大2外)
63. 肝内結石症治療の検討
○三井 毅, 三浦将司, 黒田 譲
林外史英, 浅田康行, 飯田善郎
大平政樹, 藤沢正清 (福井県済生会外科)
64. 肝血管腫の2切除例
○湊 浩志, 龍村俊樹, 笠島 学
村上 新, 杉山茂樹, 木元文彦
小山信二, 山本恵一 (富山医薬大1外)
65. 胆嚢にみられた小細胞癌の1例
○渡辺公男, 倉知 圓
(辰口芳珠記念病院外科)
仲井信雄 (仲井病院)
座長 三浦将司 (福井済生会病院外科)
66. 胆道造影に於る FCR の評価
○瀬戸啓太郎, 山本広幸, 斎藤人志
坂田則昭, 高田道明, 有塚史郎
木南義男 (金医大一般消化器外科)
67. レンメル症候群の2症例
○平野 誠, 辻口 大, 神林清作
橋川弘勝, 龍沢俊彦 (厚生連高岡外科)
68. 拡大PDを施行した胆管癌合併先天性胆道拡張症
の1例
○前田基一, 木村寛伸, 上田順彦
大山繁和, 長谷川啓, 大堀 功
加藤真史, 秋山高儀, 嶋 裕一
神野正博, 東野義信, 小西一朗
泉 良平, 小西孝司, 永川宅和
宮崎逸夫 (金大2外)
平井信行 (同 1内)
角谷真澄, 松井 修 (同 放射線科)

69. 肺癌に対する術中照射療法について
 ○阿部要一, 伊藤 博, 鈴木修一郎
 榑淵統一, 桐山誠一, 田沢賢次
 藤巻雅夫 (富山医薬大 2 外)

70. 肺癌手術症例の検討
 ○松葉 明, 平泉 泰, 笠原文和
 小林泰三, 福島 弥, 新本修一
 辻 光昭, 磯部芳彰, 木下 元
 嶋田 紘, 小島靖彦, 三輪晃一
 中川原儀三 (福井医大 1 外)

座長 小島靖彦 (福井医大第 1 外科)

71. 後腹膜腫瘍の検討
 ○高森正人, 上野桂一, 東野義信
 小西一朗, 永川宅和, 宮崎逸夫
 (金大 2 外)
 松原藤継 (同 中検病理)
 高島茂樹 (金医大消化器外科)

72. 腹腔内脂肪肉腫の 1 例
 ○菅 敏彦, 浅野栄一, 秋本龍一
 (浅ノ川総合外科)

73. 異物性腹部腫瘍の検討
 ○細川暢子, 中川公三, 高山和男
 松田一夫, 三崎明孝, 村北和広
 細川 治, 武田孝之, 中泉治雄
 谷川 裕, 森田信人, 渡辺国重
 木谷栄一, 津田昇志, 山崎 信
 (福井県立外科)

74. 術後紅皮症の 1 例
 ○伊藤雅之, 八木雅夫, 泉 良平
 広沢久史, 小西孝司, 藤田秀春
 永川宅和, 宮崎逸夫 (金大 2 外)

第 13 会場 臨床病理分科会

第 10 回 北陸臨床病理集談会

当番幹事 黒田満彦 (福井医大)

生 化 学

座長 橋本琢磨 (金沢大学)

1. 血清無機リン値の採血後の経時変化について
 ○内藤雅嗣, 松山浩之, 井村敏雄
 長原三輝雄, 長谷川俊雄, 森河 淨
 黒田満彦 (福井医科大学検査部)
 採血後全血状態で放置した場合の血清無機リン値 (IP 値) の経時変化について検討した。実験方法は、全血を 4°C 及び 25°C に放置し、一定時間ごとに遠心分離し、得られた血清を日立 736-40 E 型自動分析装置にて測定した。その結果、全血を 25°C に放置した場合、12 時間までは採血直後と比較して最大 15% の低下傾

向を示し、18 時間以降急速に高値となる傾向がみられた。その度合いは、18 時間後 13.4% 増加、24 時間後 90.5% 増加、48 時間後 4.3 倍、72 時間後 5.4 倍、96 時間後 5.8 倍であった。一方、採血直後に血清分離した場合は IP 値の経時変化は認められなかった。また採血後 4°C に放置した場合、96 時間まで、IP 値の経時変化は認められなかった。

採血後の IP 値の変化については、比較的関心が薄いですが、カリウムなどと共に経時的変化が起り易いので、検体保存に十分留意する必要がある。

2. Bilirubin Oxidase の基礎的検討と応用

○油野友二, 山本 豊, 中村英夫
 (金沢赤十字病院中央検査部)

1981 年 Murao らによって発表された Myrothecium 属由来のビリルビンに対して強い特異性を有する新酵素 Bilirubin Oxidase (BOD: EC.1.3.3.5) について基礎的検討とその応用例について報告する。使用した BOD の至適 pH は Unconjugated Bilirubin で pH 7~8, Michaelis 定数 43.5 $\mu\text{mol/L}$ 最大反応速度は 18.5 $\mu\text{mol/min}$ であった。本酵素の最大の特徴は、アルブミン結合型ビリルビンには作用しにくい、非結合型ビリルビンにはすみやかに作用する。この性質を利用して新生児の核黄疸予防の新しい検査法として注目されている Unbound Bilirubin を BOD 反応の initial oxidation velocity より求めることが出来る。Total Bilirubin の測定には、SDS やコール酸 Na のような界面活性剤を用いて Bil-Alb 結合解離を行なって測定する必要がある。SDS を用いた検討では SDS 0.04 mmol/L 以上で解離を認めた。

3. アデノシンデアミナーゼの基礎的検討と臨床的意義

○砂田智子, 岩城 護, 高柳尹立
 (富山市民病院中央研究検査部)

近年、臨床検査領域でアデノシンデアミナーゼ (ADA) が注目されているが、今回アンモニアの直接定量法による AD キット (M 社) について、測定法の基礎的検討を行ない各種疾患における血清および胸水の測定結果より、臨床的意義について考察を試みた。

測定法は、簡易で再現性が良く、干渉物質もビリルビン 12 mg/dl でわずかに低値を示す以外は、特に問題は無いと思われた。

肝疾患における ADA 活性は肝硬変症で、ch-E と $r = -0.685$ と負の相関を示し、肝癌で ZTT と、慢性肝炎で GOT, GPT とある程度の正の相関をみとめた。ADA は急性肝炎より慢性肝炎に、さらに肝硬変症、肝癌において明らかな高値を示し、肝障害の重症度を反

映していると推定された。

一方、胸水では結核性胸膜炎、癌性胸膜炎において、有意差が明瞭で鑑別上有用と思われた。

4. 血清グアナゼ測定法の検討と臨床的意義

○浦田恵美子, 岩城 護, 高柳尹立
(富山市民病院中央研究検査部)

〔目的〕最近、肝機能検査法としての導入が目目される血清グアナゼについて測定法を検討し、各種疾患における活性値の動態を検討したので報告する。

〔方法〕8-アザグアニンを基質とし生成されたアンモニニアをインドフェノールブルーとし比色定量するマルホ社キットを使用した。

〔結果〕634 mm に最大吸収、反応経時変化 15 分まで、呈色後の安定性 5 時間、直線性 52 IU/L まで、同時再現性良好、溶血の影響あり、凍結保存で長期安定、正常値 0~3.4 IU/L。

脂肪肝、胆石症、代償性肝硬変、非活動性慢性肝炎で正常~軽度上昇。非代償性肝硬変活動性慢性肝炎、肝癌で上昇。急性肝炎の極期で著しく上昇し回復期で下降する。他の肝機能検査との相関性は GOT と $r=0.91$, GPT と 0.69, LDH と 0.65 となった。

〔結論〕血清グアナゼは GOT とよく相関し、急性肝炎や慢性肝障害の病勢とよく平行し、有力な肝機能検査の一つになると思う。

血 液

座長 山崎義龜 (福井県立病院)

5. 赤血球粒度分布の検討

—特に平均赤血球容積 (MCV), 赤血球粒度分布幅 (RDW) について—

○岡田敏春, 長谷川俊雄, 熊谷祐二
市川雅彦, 黒田満彦 (福井医科大学検査部)

コールター SP IV を使用し、MCV と RDW について検討した。MCV の同時再現性 ($n=20$) の CV は 0.22~0.53% であり、RDW の同時再現性 ($n=20$) の CV は 1.20~1.83% であった。MCV の日差再現性 ($n=40$) の CV は 0.39% であり、RDW の日差再現性 ($n=40$) の CV は 1.33~2.73% と良好であった。経時変化は MCV, RDW 共に採血後 6 時間まで測定値に影響は認められなかった。血液疾患では次のようなパターンが認められた。急性骨髄性白血病 (17 例) 及び多発性骨髄腫 (9 例) では MCV, RDW 共に正常又は高値。慢性骨髄性白血病 (8 例) では MCV 正常・RDW 高値。急性リンパ性白血病 (9 例) 及び悪性リンパ腫 (15 例) では MCV 正常・RDW 正常又は高値。急性前骨髄性白血病 (2 例) では MCV, RDW 共に正

常。再生不良性貧血 (1 例) では MCV, RDW 共に高値。鉄欠乏性貧血 (13 例) では MCV 低値・RDW 高値。MCV と RDW との組み合わせにより、診断上有用な情報が得られるものと思われる。

6. 特異な経過をたどった高齢者急性白血球の 1 例について

○川島猛志, 桑原卓美, 坂本純子
島崎伊津子, 松田正毅, 佐藤伸二
高橋 薫, 桜川信男 (富山医大検査部)
山崎 徹, 市原和俊, 佐々木博
(同 第 3 内科)
小泉富美朝 (同 第 2 病理)

今回、我々は特異な経過をたどった高齢者白血病を経験したので報告する。

症例：75 歳主婦。主訴：全身倦怠感。既往歴：胃潰瘍 (58 歳)。家族歴：胃癌 (父, 夫)。現病歴：昭和 60 年 5 月初旬全身倦怠感を覚え、某医を受診、血液検査の結果白血病を疑われ 5 月 27 日日本学第 3 内科入院。現症：貧血を認め頸部に小豆大のリンパ節各 1 ケ触知。肝 1 横指触知。入院時検査成績及び経過：末梢血では WBC 3800/mm³ (芽球 71%)、骨髄では有核細胞数 206000/mm³ (芽球 93.6%)。この芽球は peroxidase 陰性 (0.5% に陽性)、Ia1 陽性、J5 陽性で FAB 分類 L2 と診断、AdVP 療法が開始された。このリンパ芽球様細胞は一時減少したが形態を異にする peroxidase 陽性の単球様細胞が増加し始めた。この細胞は α -NB esterase 弱陽性、 α -NA esterase 陽性であり血中リゾチーム 44.4 μ g/ml、尿中リゾチーム 948 μ g/ml と高値を示した。そこで BHAC-DMP 療法に切り替えたところ、血液学的に寛解に至ったが消化管出血から肺炎を併発し死亡した。

7. 悪性貧血における血液形態学的診断の問題点

○河村洋一, 池田直行, 長田三枝子
村井恭子, 基田郁子, 河合雄二
吉田ひと美, 品川恵理子
(石川県立中央病院中央検査部)

従来悪性貧血の診断には、骨髄の巨赤芽球の出現が必須条件の 1 つとされてきた。しかし近年悪性貧血の診断には、放射性同位元素を使用する血清 vit B₁₂ の測定、内因子分泌障害の有無の検査が容易になり、以前より悪性貧血は正確に診断可能となった。最近我々は、治療前に vit B₁₂ が全く投与されていない 7 例の悪性貧血を経験したので、それらの症例の骨髄への巨赤芽球の出現状況を検討した。7 例のうち、典型的な巨赤芽球の出現をみたものは 5 例であり、巨赤芽球の認め

られなかったものは2例あり、その2例のうち、1例は僅かに好中球の過分葉化が散見される程度であった。全例のMCVは $100\mu\text{m}^3$ であった。巨赤芽球の出現を認めた5例の血清vit B₁₂値は86~181 pg/mlで、血液疾患の合併はなかった。一方巨赤芽球を認めなかった2例のvit B₁₂値は165~276 pg/mlであり、1例は赤芽球癆、1例は多発性骨髄腫を合併していた。

血 清

座長 高柳尹立 (富山市民病院)

8. クリオグロブリン血症の1症例

○井上舎子, 井上寿美子, 宮本春雄
竹内啓子, 豊岡圭子, 山本詩織, 塩谷勝夫
(福井県立病院検査室)
木藤知佳志 (同 内科)

患者は64才, 男性, 無職. S54年頃より足趾の疼痛, チアノーゼを時々認め, S58年5月下肢に, 12月左肘に各々皮膚潰瘍を認めたが, PGE₁の注射で軽快. S59年2月左2, 3趾, 左2指の疼痛, チアノーゼ. 3月左2指が壊死状態になり, 当院入院.

検査所見: TP 7.8 g/dl, RA (-), RAHA \leq \times 40. ANF (-), β_1 A-gl. 119 mg/dl, β_1 E-gl. 9.5 mg/dl. CH 50, 24.5. Cryogl (+), pyrogl (-). 蛋白電気泳動で γ 位にM蛋白. IgA 152 mg/dl. IgM 72 mg/dl, IgG 1411 mg/dl. 尿中B.J.Pr. (-). ESR \geq 200/hr. 比粘度1.97 (37°C). Cryogl. 検索: 患者血清は37°C採血, 37°Cで分離され, 26°Cの室温放置後5分で白色綿状沈殿の析出をみた. ゲル化はしなかった. 37°Cで再溶解を試みるも溶けず50°C30分で溶解. これは可逆的であった. cryocrit 値11%. IgG- λ monoclonal typeと同定され, cryogl 量は約2.5 g/dl. cryoglを含む全血清ではIgG 3920 mg/dlであった. 超遠心分析では7Sであった.

9. PHA法による抗ENA抗体の測定と臨床的意義

○高村利治, 千田靖子, 中川直美
山岸幸造, 藤田信一, 松原藤継
(金沢大検査部)

抗ENA抗体価(抗RNP抗体・抗Sm抗体)を簡便に測定できるSERATEST-ENAの試用治験を報告する.

(測定原理) 家兎胸腺から抽出したRNP/Sm抗原, 56°C6時間熱処理を行ったSm抗原を固定ヒト赤血球(O型, Rh-)に感作した感作血球と被検血清中の抗ENA抗体との受身赤血球凝集反応.

(実験結果)

1. 試薬の安定性 溶解後一週間まで安定.

2. 測定感度 抗RNP抗体はRNP/Sm-PHA 320倍以上. 抗Sm抗体はSm. PHA640倍以上で二重免疫拡散法(ID法)で陽性.

3. 不規則抗体による非特異的凝集 E_c, D, E, S, Fybいずれの抗体もPHA価8倍以下であった.

4. RNP/Sm-PHA疾患別陽性率 SLE 75.5%, MCTD 100%, PSS 25.0%, Sjögren 症候群 0%, Sm-PHA疾患別陽性率 SLE 47.2%, MCTD 0%, PSS 16.7%, Sjögren 症候群 0%.

5. ID法で同定した抗ENA抗体とPHA反応抗RNP抗体陽性47例はRNP/Sm-PHA 320倍以上, 抗Sm抗体陽性12例はSm-PHA 1280倍以上. 抗SS-B抗体単独例, 抗SS-A抗体・抗SS-B抗体併存例, 抗Scl-70抗体単独例, 抗Scl-70抗体・抗SS-A抗体併存例はPHA抗体価40倍以下であった.

10. 一元免疫拡散法による免疫抑制酸性蛋白測定の検討

○長谷川俊雄, 杉本英弘, 長原三輝雄
井村敏雄, 黒田満彦 (福井医科大学検査部)

一元免疫拡散法による免疫抑制酸性蛋白(IAP)の測定について, IAPプレート(三光純薬)を用いて検討を行った. その結果以下の結論が得られた. すなわち(1)反応温度37°C, 反応時間48時間の測定が最良の条件であった.(2)同時再現性CV 1.1-1.6%, 日差変動CV 2.8%, 直線性1600 $\mu\text{g/ml}$ と良好な結果であった. ただし測定のとど検量線をたてることが望ましい.(3)プレート間差, ホール位置による違い, および基準液のロット間差は認められなかった. ただしプレートのロット間差が認められた.(4)健常値はMean 456 $\mu\text{g/ml}$, SD 36 $\mu\text{g/ml}$ (N=50)で対数正規分布を示し, 95%範囲は229-484 $\mu\text{g/ml}$ となった.(5)健常者 (Mean 456+SE 9.4 $\mu\text{g/ml}$, N=50)と癌患者の血清IAP値を比較したところ, 胃癌(461+41 $\mu\text{g/ml}$, N=21)と結腸癌(624+97.2 $\mu\text{g/ml}$, N=11)で有意に高値(p<0.01)となることが確認された.

11. ラテックス比濁法を用いた尿中微量アルブミン測定の基礎的検討

○杉本英弘, 橋本儀一, 森河 浄
長谷川俊雄, 黒田満彦 (福井医科大学検査部)
玉井利孝, 中井継彦, 宮保 進
(同 第3内科)

ラテックス比濁法を用いた尿中微量アルブミン(以下UMA)の測定を開発し, その基礎的及び臨床的検討を行ったので報告する. 測定方法は, 抗人アルブミン家兎IgGを吸着したラテックスと尿中アルブミンの

凝集反応によって生ずる濁度を、LA-2000を使用し、585 nmにおける吸光度の変化としてrate assayした。本法の同時再現性は、CV=0.47~1.47%、添加回収率は94.5~105.7%、また916 mg/lまで直線性が得られたが、比較的高濃度においてプロゾーン現象が認められた。試験紙法で尿タンパク陰性の健常者(41名)と、尿タンパク(-)又は(±)の糖尿病患者(25名)についてUMAを測定したところ、それぞれMean=12.52 mg/g・Cr, SD=8.85 mg/g・Cr; Mean=70.12 mg/g・Cr, SD=104.0 mg/g・Crの結果となり、後者が有意な高値であった。(p<0.05)以上より、試験紙法との併用などによりプロゾーンチェックを行えば、本法によるUMA測定は簡便、迅速であるので、糖尿病性腎症の早期発見と、その経過観察に有用であり実用性も高いと考えられる。

生 理

座長 福永寿晴(金沢医科大学)

12. マイコン心電計とパソコン組み合わせによる心電図データ処理システムの構成

○山崎秀一, 二俣秀夫, 柴山正美
中田明美, 池田孝之, 松原藤繼
(金沢大検査部)

大沢規人, 新保正忠(フクダ電子株式会社)

自動診断機能を有するマイコン心電計とパーソナルコンピュータとを組み合わせ、波形情報を含む心電図データの半永久的保存と管理を目的とした。心電図データ処理のシステム化を試みた。

システムのハード構成は、マイコン心電計 FCP-220(フクダ電子)4台、パソコン FM 11(富士通)を中心としたデータ1次処理装置、パソコン N 5200(日本電気)を中心とした、データ2次処理装置の3つの部分から成っている。

このシステムの導入により、①波形情報を含む心電図解析結果のフロッピーディスクへのファイル、②患者IDの入力による患者データの検索、患者個人の時系列データの比較、③年令、性別、検査項目、診断名などの条件の組み合わせによる患者データの検索、④心電図結果のオーバーリード、⑤検査台帳、日報、月報の自動出力、などが可能となり現在有効に運用されている。

13. 長時間携帯用脳波記録装置の有用性について

○奥田忠行, 林 史朗, 柴 則子
松田正毅, 桜川信男(富山医薬大検査部)
山谷美和, 小西 徹(同 小児科)
堀 有行, 数川 悟, 中村一郎

(同 神経精神科)

通常の EEG と携帯用脳波長時間記録装置(Ambulatory EEG)を同時記録し、波形を比較検討し、実際に臨床例で使用した。対象および方法: てんかん患者30名(3~35才)を Ambulatory EEG で記録。1名は、通常の脳波計で同時記録。電極は10~20法で、Ambulatory EEG は1 cm 内側に設置し記録。処理方法: ①直接 jet recorder で描記、② pagemodedisplay. recorder はグロリア社製 Medidata-300。結果および考察: ①通常の EEG と jet recorder, pagemodedisplay とともに δ , θ , α および睡眠紡錘波は類似波形だったが、spike や基線の動揺は少し異った。② recorder の周波数特性は、低域でやや増巾、高域は25 Hz で減衰。③臨床的に、④笑い発作前、中、後とも明瞭に記録できた。⑤通常の EEG で検出不能だった spike を発見し診断できた症例もあった。以上より Ambulatory EEG は、24 時間の日常生活を自然の状態に記録でき、臨床検査上有用と思われる。

14. 1 回呼吸法 CO 肺拡散能力(DLco)測定における 2, 3 の問題点

○内山充司(金沢医科大学中央臨床検査部)
黄 正寿, 福永寿晴, 寺畑喜朔
(同 臨床病理)
大谷信夫(同 呼吸器内科)

全自動肺機能測定装置(RIMCOS-11)に組み込まれた一回呼吸法肺拡散能力検査の測定値の精度について検討した。装置に含まれるヘリウムカサロメータと赤外線 CO 分析器は非線形歪みを有し、このため従来の二点較正法では DLco 測定値は23%過大評価された(健常者5名)。これらのガス分析器を用いた機種では、非線形特性の補正を行うことが必須の条件である。一方、ヘリウムカサロメータの酸素濃度変化による影響は、DLco 測定では考慮する必要がない。健常者の DLco 測定値は、Breath hold time(BHT)を5, 10, 15, 20 秒と増加するにつれて減少した。これは Krogh の理論式が、ガス吸入中と呼出中の CO 拡散量を無視しているために生じたものである。この問題は Multiple breath hold 法を用いれば改善された。ただしこの方法でも、5 秒の BHT を用いた場合は DLco は過大評価され、したがって10 秒以上の BHT を用いる必要がある。

15. Partial expiratory flow volume curve 測定法についての検討

○工保百合子, 上尾友美恵, 二俣秀夫
松原藤繼(金沢大検査部)

金森一紀, 岡藤和博, 魚谷浩平
(同 第3内科)

Partial expiratory flow-volume 曲線の測定法には, 安静吸気位から呼出する法(第1法)と, TLCまで吸入後, 50~60%VCまで一回呼出し, 10~15秒の breath holding を行ってから RVまで呼出する方法(第2法)とがあります。今回, 我々は, この2つの方法で深吸気の影響を健康女性及び, 非発作時の気管支喘息患者男性を対象に比較検討しました。そして, これらより, DI Index については, 方法論による差は, 認められませんでした。PEF₂₅に関しては健康人では第1法の方が大きくなり, 気管支喘息では, 拡張剤吸入後に PEF₂₅が, 第2法で有意に大きな値を示しました。この原因は, 不明ですが, 喘息患者では, 15秒の breath holding が困難であり, 呼出努力の差も考慮する必要があると思われ, PEFV 曲線の測定法としては, 安静吸気位より呼出する方法の方が, 適当と考えられた。

細菌

座長 小西健一(富山医科薬科大学)

16. エンテロトキシン産生黄色ブドウ球菌の検討

○黒川佐知子, 飯野 緑, 山形美津枝
川口清美, 志甫美德, 高柳尹立
(富山市民病院中央研究検査部)

最近3ヶ月間に当院の臨床材料から分離された黄色ブドウ球菌100株についてエンテロトキシン(Ent)産生性を検討し, その型とコアグラゼ(Coag)型との関係や薬剤感受性成績について追究した。

①臨床材料から分離される黄色ブドウ球菌は膿由来が一番多いが, Coag IV型が圧倒的に多い(42%)。②Ent産生率では膿由来が非常に高い傾向にあり(70~90%), Ent A型が多かった(47%)。しかし喀痰・咽頭由来のものはEnt産生率は低く, Coag型, Ent型についても特定の傾向は得られなかった。③Coag型とEnt型との関係についてはCoag IV型にEnt産生株が多く, しかもEnt A型がほとんどを占めた。これはTSS患者由来や食中毒患者由来の菌についての報告と一致した結果となった。④Ent A型を産生する株には多剤耐性株やオキサシリン・セフェム耐性株の分離率が高い傾向をみとめ, 今後, 難治性感染症の原因菌として重要な問題となるであろうと考えられる。

17. ブドウ球菌の各種鑑別試験の比較検討

○山下政宣, 久保克美, 長谷川俊雄
黒田満彦(福井医科大学検査部)

臨床材料由来のブドウ球菌を用いて, コアグラゼ

試験, ラテックス凝集反応, レシチナーゼ反応(以下LV反応), DNase産生能, マンニット分解能および色素産生能について比較検討した。コアグラゼ試験と他の鑑別試験の一致率はラテックス凝集反応92%, LV反応98%, DNase産生能90%, マンニット分解能89%, 色素産生能92%であり, LV反応が最もよい一致率であった。また, LV反応はその術式の簡便さからも日常検査におけるブドウ球菌の鑑別試験として実用性が高いものと思われた。DNase産生能, マンニット分解能はコアグラゼ試験陰性株では陽性を示す株がそれぞれ26%, 29%みられた。ラテックス凝集反応はコアグラゼ試験との一致率がLV反応より低いが, 判定が1分以内で行え, 凝集像が明瞭であることから, 迅速な同定を目的とした場合に有用であると思われた。

18. 術中胆汁における細菌学的検討

○福島律子, 高野太慶司, 渡辺駿七郎
(国立金沢病院研究検査科)
道場昭太郎(同 外科)

昭和55年1月より昭和59年12月までの5年間に胆道疾患手術症例より, 術中採取された胆汁316例について細菌学的検討を行った。

[検討結果] 316例中細菌陽性例は152例, 検出率48%。結石症例と胆汁中細菌の関係では, 胆嚢結石例73/203例, 総胆管結石例26/28例。結石陽性で細菌も陽性は41%, 結石陽性で細菌が陰性が44%で, 結石の存在と細菌陽性とは無関係と判明。しかし, 総胆管結石では細菌陽性率93%。また, A・B両胆汁を採取し得た症例では両者共に同一菌種であった。5年間の分離優位菌はKlebsiella, E. coli, Enterobacterで, 3者の細菌陽性中に占める割合は51%。嫌気性菌検出率は6%で, E. coliとの共存が多かった。検出菌において複数菌感染が51%あり, それらの薬剤感受性試験では単独感染より効果が悪い。各種胆道感染菌の抗生剤として第3世代のCephem剤が特に有効であったが, 複数菌感染を考慮した使い方が望まれる。

19. 慢性胆嚢炎患者のB胆汁から分離された新種とみられる一好塩ビブリオの諸性状

吉国桂子(浅ノ川総合病院検査部)

○小西健一(富山医大, 医, 細菌・免疫)

慢性胆嚢炎を併発した75才の心疾患患者のB胆汁から分離されたビブリオの生物学的諸性状を検討したところ, 低塩耐性の好塩菌であり, 乳糖分解性であるが既知のビブリオとは異り, マンノースを分解せずキシロースを分解する新しいビブリオであることが確認さ

れた。毒力は *V. vulnificus* に比してやや弱かったが、マウスは敗血症で斃死した。加熱死菌とホルマリン死菌、およびそれぞれに対する抗血清を用いて抗原分析を行った結果、*V. cholerae* を含むビブリオに共通の抗原、*V. cholerae* を除くビブリオに共通の抗原、*V. vulnificus* および *V. alginolyticus* に共通の抗原および本菌に特有の抗原があることが明らかとなった。又 DNA の相同性を検した結果、上記の各ビブリオ、*V. anguillarum*, *V. ordalii* とは全く異なるものであり、G+C%は 45.6 でビブリオ属の値を示した。

病 理

座長 渡辺駿七郎 (国立金沢病院)

20. 巨細胞封入体の観察

○川畑圭子, 渡辺駿七郎, 川中 剛
富田小夜子, 尾崎 聡
(国立金沢病院研究検査科)

我々は過去十数年間に経験した致死性サイトメガロウイルス (以下 CMV) 感染症 3 症例の巨細胞封入体 (以下 CMI) の観察を試みた。症例 1 は新生児で子宮内感染例。特に腎・肝の上皮細胞によく CMI を認め、細胞質内封入体も伴った。症例 2 は 68 才男性。両側ヒマン性混合性肺炎で経過約 2 ヶ月。肺胞上皮に CMI をよく認めた。症例 3 は 57 才男性。回腸末端部多発潰瘍で経過約 7 ヶ月。CMI は回腸潰瘍底の線維芽細胞や血管内皮細胞に認めた。症例 2, 3 ではステロイドが多量投与された。アザン染色及び Feulgen 染色では核内封入体は赤染し、PAS では細胞質内封入体が陽性。核内封入体の大きさは細胞質内封入体の有無にかかわらず 9 μm 前後で細胞質内封入体を持つものは細胞径 30~40 μm 。免疫組織学的検討として、症例 2 の剖検血清 (IF 512 倍以上) を 1 次抗体として ABC 法を行なった。しかし、プロナーゼ処理をしても明確な陽性所見は得られなかった。以上をスライドで供覧した。

21. 肺小細胞癌における核 DNA の定量

○西 一典, 塚田 実, 細川洋平
黒田満彦 (福井医科大学検査部)

肺小細胞癌 2 症例の喀痰を用いて核 DNA 量を測定し、検討した。方法は喀痰をすり合わせ塗抹後、95% エタノールで湿潤固定し、Pararosanilin-Feulgen 染色を行った。測定はオリンパス社 BHZ-QRFL を使用し、コントロールは好中球を約 20 個測光して平均値を 2 C とした。癌細胞核 DNA 量は、症例 1 で平均値 4.66 C, 最小値 1.42 C, 最大値 16.12 C, 症例 2 は平均値 4.74 C, 最小値 1.22 C, 最大値 8.66 C となった。DNA 量のヒストグラムでは、症例 1, 2 とも 2C, 4C

にピークがあり 8C を越える polyploid cell を認め、DNA 合成期の細胞の存在が示唆された。しかし、明らかな aneuploidy は確認できなかった。また同時に測定した好中球、組織球の C. V. 値は 15.9%~22.0% であった。

以上の結果より、変性細胞の多い喀痰でも化学療法の効果等を知る指標として有用であると思われる。

22. Multicentric angiofollicular lymph node hyperplasia の 1 例

○細川洋平, 西 一典, 塚田 実
森河 浄, 黒田満彦 (福井医科大学検査部)
福田 優 (同 第 1 病理)
木村和弘, 稲津哲也, 山村真由美
中井継彦, 宮保 進 (同 第 3 内科)
堂前尚規 (同 第 1 内科)

比較的稀な疾患である multicentric angiofollicular lymph node hyperplasia (MAFH) の 1 例を報告する。

症例は 48 才女性。全身浮腫、易疲労感、微熱を主訴とし、心嚢水貯留を近医で指摘され、福井医大 3 内科にてウイルス性心膜炎と診断され、安静、塩分制限、及び利尿剤投与で経過観察中、全身性リンパ節腫脹をきたし、頸部及び腋窩リンパ節生検組織では、やや小さな濾胞がびまん性に存在し、濾胞中心部はほぼ血管様構築で置換され、周囲には小リンパ球の同心円状配列がみられた。免疫組織化学的には主として抗 IgG 抗体陽性の形質細胞を濾胞間に多く認めた。電顕的には、微細な filament と pinocytic vesicle を有する内皮細胞が基底膜に囲まれて濾胞中心部にあり、濾胞間にはゴルジ装置と rER に富む形質細胞の増生を認めた。さらに腹部リンパ管造影では大動脈から総腸骨動脈リンパ節の著明な腫大を認めた。以上のことから、本例は MAFH, plasma cell type であると診断した。

23. 眼窩に発生した B-cell lymphoma と考えられる 1 生検例

○肥田高嶺, 若木邦彦, 小泉富美朝
(富山医薬大病理)
鍛冶兆治, 大角智寿子, 中村泰久
(同 眼科)

症例は 86 才女性。右眼球突出を主訴に来院。精査にて右眼窩腫瘍の診断にて腫瘍摘出術施行。肉眼的には、拇指頭大、黄白色で結節状外観を呈し、表面は比較的平滑で、均質な剖面を持った腫瘍であった。組織学的には、lymphoid follicle の増生を呈し、時に germinal center も見られ、follicular lymphoma, medium-sized

cell type と診断された。lymphoid follicle 周辺には plasma cell の増殖が強く、follicle 中心では tingible body macrophage や immunoblast を認める。酵素組織化学的染色では、ATPase が腫瘍細胞の細胞膜に陽性で、単クローン抗体による免疫染色では Leu-1⁻, Leu-6⁻, Leu-10⁺, OKIa1⁺, OKM1⁻であり B-cell 由来と考えた。免疫グロブリンについては γ 鎖および λ 鎖が陽性で免疫電顕にて IgG 産生の所見が得られた。電顕的には、plasma cell に至るまでの各分化段階の細胞形態を証明した。本例は plasma cell への成熟を同時に示す節外性 follicular lymphoma で稀れな症例と考える。

第14会場 リハビリテーション医学分科会

第13回 北陸リハビリテーション医学集談会

一般演題

1. 失語症患者における発語の流暢性—Part II
 - 伏江菜穂子, 鈴木重忠, 能登谷晶子
有川喜代美 (金沢大学病院)
大森周二 (恵寿総合病院)
水上洋子 (厚生連高岡病院)
白木幸三 (芳珠記念病院)
2. 良好な改善を示した一皮質下失語症例
 - 大森周二, 植生知則 (恵寿総合病院)
鈴木重忠, 能登谷晶子 (金沢大学病院)
榎戸秀昭 (金沢医科大学)
3. 失語症患者の社会復帰
 - 稲村 恵, 黒川喜代美, 飯田裕美
伊藤清吾 (福井病院)
4. 失名詞失語と思われる症状を呈した脳梗塞の1例
 - 吉村菜穂子, 長尾竜郎, 平野正治
中林智之 (富山高志リハビリ病院)
5. 当院における長期入院患者の社会適応の試み
 - 岡田真弥子, 谷野亮爾, 谷野美美子
門田 晋 (谷野呉山病院)
関 昌家 (金沢大学医短)
6. “Locked in” Syndrome の1症例
 - 富田照美, 岡山智加子, 北野喜行
大橋雅広 (砺波総合病院)
松田 勇 (金沢大学医短)
7. 進行性核上性麻痺患者の症例報告
 - 中島邦博, 伊藤清吾, 黒川喜代美
(福井病院)
8. 家庭復帰した脳卒中患者の通院作業療法の1考察
 - 大西信勝, 卜部弘子, 進藤浩美
植生知則 (恵寿総合病院)
9. 当院における脳卒中片麻痺患者の興味調査
 - 田中昌代, 平野千賀, 北形悦子
寺田佳世, 山崎芳恵, 中谷藤房
(加賀八幡温泉病院)
勝木道夫 (声城病院)
田川義勝 (金沢大学医短)
10. 失調症の評価
 - 洲崎俊男, 浅井 仁, 立野勝彦
(金沢大学医短)
野村忠雄 (金沢大学病院)
11. 加速度計による上肢協調運動の評価の試み
 - 鏡田智美, 尾尻恵子 (金沢大学病院)
松田 勇, 山口昌夫 (金沢大学医短)
12. CP 児に対する食事動作評価表の作成の試み
 - 島田 栄, 辛島千恵子, 中川等史
安本大樹, 浅倉久美子, 山根早由里
辻 成人 (石川整肢学園)
13. 半側空間無視と日常生活動作
 - 坪田裕美子, 佐々木久美子, 川越清次
中村真紀子, 松村政江, 伊藤清吾
(福井病院)
14. 人工肘関節置換術後の1症例
 - 出水利雄, 山田俊昭, 西島雄一郎
東田紀彦 (金沢医科大学)
15. セメントレス人工股関節置換術後の理学療法について
 - 弓削 類, 前田真一, 三秋泰一
染矢富士子, 野村忠雄 (金沢大学病院)
浅井 仁, 立野勝彦, 山口昌夫 (金沢大学医短)
16. アウトサイドロッキングヒンジを使用した肘屈曲装具の1症例
 - 松平洋子, 川合 博, 番谷 巖
(富山医薬大病院)
田村 茂 (富山高志リハビリ病院)
17. ADL 自立した高齢者両下腿切断の1症例
 - 前田真一, 弓削 類, 三秋泰一
染矢富士子 (金沢大学病院)
立野勝彦 (金沢大学医短)
18. Toe to Thumb 術後の作業療法
 - 柴田克之, 生田宗博, 山口昌夫
(金沢大学医短)
山内茂樹 (金沢大学病院)
吉村光生 (福井医科大学)
19. 自転車エルゴメーターによる腰痛患者の筋電図
 - 内山清一, 川畑義光, 大島 豊
大谷源造, 岩尾一美 (恵寿総合病院)
20. 疼痛に対する低出力レーザー療法の試用経験
 - 小崎雅克, 西野 学, 薬師八重子

(加賀八幡温泉病院)
勝木道夫 (芦城病院)

21. 呼吸器リハビリテーションの現状と阻害因子の検討

○島田政則, 高島浩昭, 堀 秀昭
髪元朋史, 奥谷潤一郎, 松村政江
(福井病院)

第15会場 臨床口腔外科分科会
第5回 臨床口腔外科北陸地方会

一般演題

1. 巨大な歯根のう胞の1例

○宮田 勝, 東野純也, 玉井健三
(金沢大)

2. 上顎洞内を充満せる follicular dental cyst の1例

○中新敏彦, 仲井雄一, 室木俊美
玉井健三 (金沢大)

3. 巨大な下顎正中のう胞の1例

○仲井雄一, 藤元栄輔, 玉井健三
(金沢大)

4. 上顎小白歯部にみられた巨大な Epulis の1例

○高沢一良, 船本長一朗, 中村 哲
渡辺佐良 (金沢医大)

5. Ameloblastoma の1例

○室木俊美, 玉井健三 (金沢大)

6. Sjögren's syndrome に合併した耳下腺のう胞の1例

○印枚康祐, 並川有隣 (福井県立)

7. 結核性顎部リンパ節炎の1例

○水分寿雄, 沖田 進, 岩井正行
新川いくみ, 古田 勲 (富山医薬大)
沢本正登 (富山赤十字)

8. 嫌気性菌感染症と思われる舌・化膿性肉芽腫の1例

○田中真也 (石川県中)

中新敏彦, 玉井健三 (金沢大)

9. 耳下腺に発生した Küttner 腫瘍を思わせた1例

○東野純也, 藤元栄輔, 仲井雄一
玉井健三 (金沢大)

10. 大理石骨病に併発した上顎腐骨の1例

○山田隆寛, 吉森寿美代, 上田美保子
太田真治, 小林 信, 古田 勲
(富山医薬大)

11. Albright's syndrome の1例

○並川有隣, 印枚康祐 (福井県立)

12. 口腔内感染症創の臨床細菌学的検索

○松原完也, 加藤隆三, 押尾 武
玉井健三 (金沢大)

13. 上顎中・側切歯, 犬歯埋伏の1治験例

○出村 昇, 和田清聡, 香林正治
窪田道男, 宮地優子, 須佐美隆三
(金沢医大矯正)

14. 大白歯部舌側に生じた広範な下顎骨隆起の1例

○斉藤 進, 真館藤夫, 小竹 弥
三島純子, 吉田秀彦, 古田 勲
(富山医薬大)

15. Le Clerc 氏手術による習慣性顎関節前方脱臼の4治験例

○小金澤一美, 伊藤俊祐, 久保田祐子
綾坂則夫, 清水孝之, 新家信行
人見権次郎, 石井保雄 (福井医大)

16. 鳴和総合病院歯科口腔外科における過去2年7ヶ月の入院患者の臨床統計的観察

○加藤一栄 (鳴和総合)
玉井健三 (金沢大)

17. 当科における顎関節症の臨床的観察

○綾坂則夫, 伊東俊祐, 久保田祐子
清水孝之, 新家信行, 小金澤一美
人見権次郎, 石井保雄 (福井医大)

18. 口蓋粘膜骨膜弁により閉鎖した上顎欠損症例

○細川史郎, 沖田 進, 岩井正行
牧野 明, 河合宏一, 古田 勲
(富山医薬大)

19. 下口唇癌再建の1例

○佐藤秋絵, 杉本裕史, 吉森寿美代
山田 耕, 岡野秀成, 古田 勲
(富山医薬大)
梶村悦郎 (砺波総合)

20. 歯肉癌摘出術後の再建法の検討

○藤元栄輔, 中川清昌, 東野純也
中新敏彦, 室木俊美, 玉井健三
(金沢大)

21. 当科における顎骨再建症例の臨床的観察

○清水孝之, 伊東俊祐, 久保田祐子
綾坂則夫, 新家信行, 小金澤一美
人見権次郎, 石井保雄 (福井医大)

22. 歯槽堤形成術式に関する臨床的検討

○新家信之, 伊東俊祐, 久保田祐子
綾坂則夫, 清水孝之, 小金澤一美
人見権次郎, 石井保雄 (福井医大)

23. LMOX の術後投与に対する臨床効果

○押尾 武, 松原完也, 加藤隆三
宮田 勝, 仲井雄一, 東野純也

室木俊美, 沖野善則 (小松市民)
田中真也 (石川県中)
荒川昌子, 中新敏彦, 藤元栄輔
坂下英明, 中川清昌, 玉井健三
(金沢大)

24. MOMの唾液移行に関する実験的検討

○加藤隆三, 松原完也, 押尾 武
宮田 勝, 仲井雄一, 玉井健三
(金沢大)

25. 味噌の熱傷に関する実験的研究

○高木嘉子, 辻川慶子, 吉田 徹
大平三四郎, 塩田 覚 (金沢医大)

第16会場 皮膚科分科会

日本皮膚科学会北陸地方会第315回例会

演 題

1. 酒皸様皮膚炎の数例

○鈴木裕至, 上田恵一, 丸尾 充
青山文代, 横地きく香 (福井医大)

2. 色素性痒疹の1例

○島田由香里, 松本謙一 (富山市民)

3. Sweet症候群

○田辺俊英, (富山赤十字)
長井 忠 (富山市)

4. けい酸加里肥料による化学熱傷

○鈴木 薫, 武田行正, 清 佳治
(金沢医大)

5. 毛孔性紅色糠癬疹の1例

○高石公子, 上田恵一 (福井医大)

6. SLE?の1例

○辻岡 馨, 米澤郁雄 (福井赤十字)
林 正則 (同 内科)

7. Drug-induced SLE?

○加世多秀範, 久保勝彦 (福井県立)
春木伸一, 若林正三郎, 河合邦夫
(同 小児科)

8. 外傷後癭痕に生じた石灰沈着症

○福井米正 (黒部市民)
小林博人 (金沢医大)
杉浦 仁 (金沢大第2病理)
松井恒雄 (魚津市)

9. ペラグラ

○能川昭夫, 館 恒二 (厚生連高岡)
河合昂三 (同 第1内科)

10. Pseudoxanthoma elasticumの1例

松井千尋 (富山医薬大)

11. Nodular fasciitisの2例

齋藤明宏 (富山医薬大)

12. 遅発性両側性太田母斑

○川原 繁, 高田 実 (金沢大)

13. Naevus lipomatosus superficialis

○三井 徹, 北村清隆 (国立金沢)

14. Leukoedemaの1例

○坂井秀彰, 川島愛雄, 齋藤利子
(石川県立中央)
小森 貴 (同 耳鼻咽喉科)

15. 疣贅様変化を伴った表皮嚢腫

○服部邦之, 高田 実 (金沢大)

16. 毛包脂腺系の腫瘍

石倉多美子 (公立石川中央)

17. Bowen病 -多発例-

大槻典男 (舞鶴共済)

18. Osler-Rendu-Weber病

○東 晃 (金沢大)
五十嵐厚 (同 第1内科)

19. Digital mucous cyst (2例)

○野村佳弘, 倉田幸夫 (金沢大)

20. Dermatofibrosarcoma protuberanceの1例

○清 佳浩, 木村敦子, 小林博人
(金沢医大)
石倉直敬, 安田幸雄 (同 形成外科)

21. 髄膜炎を伴った帯状疱疹の1例

関 太輔 (富山医薬大)

22. 水痘肺炎を合併した成人水痘例

○中村 聡 (金沢大)
増田博司 (金沢市)

23. Bowenoid papulosis of the genitalia

○筒井清広, 光戸 勇 (金沢大)
三木 甫 (金沢市)

24. 頸症梅毒

○谷口 章, 鍛冶友昭 (富山県立中央)
福田 繁 (富山市)

25. 顔面播種状粟粒性狼瘡

○館 偉二, 能川昭夫 (厚生連高岡)

第17会場 麻酔科分科会

第37回 日本麻酔学会北陸地方会

一般演題(1)

座長 福井医科大学麻酔科 杉浦良啓

1. PGE₁の微小循環および血液レオロジーに及ぼす影響

○加藤 忠 (国立循環器病センター研究所)
対馬信子 (同 内科)
後藤幸生 (福医大麻酔科)

2. Org NC45 の臨床研究

—第一報 Single Twitch による各種麻酔方法の影響の検討—

○野村良明, 野村俊之 (金大麻酔科)
浅地 直 (市立砺波総合病院麻酔科)
奥田 肇, 山本 健, 村上誠一
(金大麻酔科)

3. 北陸地方における pseudocholinesterase C₆保有者の頻度

○杉森 隆, 伊藤祐輔 (富山医薬大麻酔科)

4. ウサギ S-A node における Lidocaine, Mepivacaine, Bupivacaine の効果

○松田知之, 岡宗真一郎, 青野 允
森 秀麿 (金医大麻酔科)

一般演題(2)

座長 金沢大学麻酔科 山本 健

5. 新生児麻酔 10 年の検討

○弘中康雄, 杉野式康, 須藤 明
柳沢 衛, 青野 允, 森 秀麿
(金医大麻酔科)

6. Hyperthyroidism の麻酔

—術前コントロールの不十分な 2 症例—

○高田宗明, 八木裕一郎, 清水芳盛
原田 純, 高橋光太郎, 後藤幸生
(福医大麻酔科)
浦野博秀 (同 手術部)

7. 頸部脊損直後の全身麻酔の経験

○杉本祐司, 真田宏人, 布 昌彦
斉藤道夫, 上田隆夫 (福井県立病院麻酔科)

8. 肺手術の呼吸機能に及ぼす影響 (血液ガスの変動を中心に)

○柳田康彦 (石川県立中央病院麻酔科)
野村良明, 片岡久範, 小林 勉
村上誠一 (金大麻酔科)

9. Sleep apnea syndrome が疑われた患者の長期人工呼吸の weaning

○布 昌彦, 真田宏人, 上田隆夫
(福井県立病院麻酔科)
片岡久範 (金大麻酔科)
相沢芳樹 (同 救急部)

一般演題(3)

座長 富山市民病院麻酔科 中西拓郎

10. 救命し得た淡水溺水の 1 症例

○田辺 毅, 松田 修, 柳沢 衛
青木 允, 森 秀麿 (金医大麻酔科)

11. A-C bypass 術中におけるアナフィラキシーショックの経験 —c-AMP 製剤が有効と思われた症例

○加納千栄美, 高田宗明, 原田 純
中嶋一雄, 杉浦良啓, 高橋光太郎
後藤幸生 (福医大麻酔科)

12. 急性薬物中毒 108 例の検討

○真田宏人, 布 昌彦, 杉本祐司
斉藤道夫, 上田隆夫 (福井県立病院麻酔科)
寺沢秀一 (同 内科)

13. ピロキシカム (フェルデン®) による薬剤性光線過敏症の 1 例

○乾早智子 (石川県立中央病院麻酔科)
佐伯善機, 山本 健, 村上誠一
(金大麻酔科)
大島茂人 (敦賀市民病院皮膚科)

一般演題(4)

座長 金沢医科大学麻酔科 青野 允

14. 局所麻酔時の鎮静に対する flunitrazepam の臨床評価

○遠山芳子, 石田 浩, 吉田 豊
乾早智子, 柳田康彦, 新多恵子
浜谷和雄 (石川県立中央病院麻酔科)

15. 硬膜外ブロックが予想以上に広汎な領域に及んだ帯状疱疹後神経痛の 2 症例

○大村繁夫, 東藤義公
(厚生連高岡病院麻酔科)
村上誠一 (金大麻酔学教室)

16. 当科における帯状疱疹および疱疹後神経痛について

— 6 年間の統計的考察 —

○久世照五, 島田雅子, 里村 敬
伊藤祐輔 (富山医薬大麻酔科)

17. グアネチジン静注による局所交感神経ブロックの経験

○東藤義公, 大村繁夫
(厚生連高岡病院麻酔科)
村上誠一 (金大麻酔学教室)

18. 当科における内臓神経ブロック

○生垣 正, 浅地 直
(市立砺波総合病院麻酔科)
谷口淳朗, 村上誠一 (金大麻酔学教室)

特別報告

1. 実験的脳低酸素症の形態学的研究

増田 明 (富山医薬大麻酔科)

座長 久世照五 (富山医薬大麻醉科)

2. 喘息発作状態における β -作動薬吸入の影響に関する実験的研究

原田 純 (福医大麻醉科)

座長 高橋光太郎 (福医大麻醉科)

3. 実験的 aspiration pneumonia に対する surfactant 補充療法

上田隆夫 (福井県立病院麻醉科)

座長 小林 勉 (金大麻醉科)